

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.205

2024/10/1

【毎偶数月1日発行】



発行者の住所：〒108-0073 東京都港区三田3-4-17-206 TEL:03-6435-2030 FAX:03-6435-2031

Eメール：info@iken30.jp ホームページ：https://www.iken30.jp

郵便振替：00120-9-359506 市民の意見30の会

* 隔月刊/普通会員（購読料・送料とも）年2500円、協力会員年5000円、敬老・障がい者会員年2000円、頒価1部400円。

【軍事郵便】中村霜子宛

其の後の様子はどうか。お父さんお母さんおばあちゃんと仲良くやってくれるだろうな。お腹の赤はあばれるだろう。俺にかはつて親孝行と赤を大事にそだてるのを引き受けてくれ。こちらは半分寒いがいい修養だ。俺の学友、後輩、知人等に手紙を出してくれ。軍隊でくれる着物で充分だから、余分な心配はせぬよう体に心掛けねばならぬよ。

（新版 戦没画学生人名録「より」）

『霜子』中村萬平（無言館蔵）



市民の意見 205号 目次

巻頭詩 「笑い声」

石川逸子 2

■シリーズ 原発問題

福島復興の闇

和田央子 4

日本電源の闇

山崎久隆 7

★「刀を差さない」国家の誕生から「われわれ」のサラタ社会へ

玄順恵 11

★「国防最前線」の島にされた与那国島

竹内光浩 15

★79周年追悼「山の手空襲」を語りつぐ集い

佐藤いつ子、山本唯人、古賀麻里 19

★イスラエル不招待をめぐる議論

山口響 24

■連載

皇室情報の検証 ⑩

天野恵一 27

〈よその目線〉の広島 ⑮

田浪重央江 31

■運動の現場から

原子力規制委員会前

毎水曜昼休み抗議行動

阿部めぐみ 33

●意見広告運動事務局だより

●読者のおたより

●会計報告

●編集後記

36

35

34

題字 安西賢誠
カット 村雲司

印刷・レイアウト (有) 山猫印刷所

笑い声

石川逸子

輜重兵特務一等兵 キタガワ・シヨウゴ

1937年5月14日 銃弾に左胸部を貫かれ

戦死 享年24

幼い甥・姪たちへの手紙

「いまかうして戦ひあつてゐる人々の中には

一人もいけない人はいやしない

ただ戦争だけがいけないことなのだ」

若者は 一発の銃も「敵」に向けないことを

おのれに課した

中国の子どもたちとのんびり遊び 里人にタバコを分ける

家の中に彼を 招待し 飴をもてなし

入浴まですすめる 里人たち

◆巻頭詩の作者◆

石川逸子（いしかわ・いつこ）

1933年、東京生まれ。日本現代詩人会会員。1982年より29年間、ミニコミ通信『ヒロシマ・ナガサキを考える』全100号を編集・発行。

著書に、『オサヒト覚え書き——亡霊が語る明治維新の影』（一葉社）、詩集に、『定本 千鳥ヶ淵へ行きましたか』（影書房）ほかがある。

「おじさんは 憎い敵兵は ただ一人も見やしなかった」

「おじさんは 戦友に文句を言われても 自分では
とてもいい気分なのさ」

「次には ロバの話 水牛の話 豚の話を書こう」

記した 若い「おじさん」は

小さな骨になって 生家へ帰ってきた

骨は（だれ一人殺さずにすんだ）と

嬉しそうに 笑っていた

「僕は一つの解決を射止めて、気軽に帰ってきた。

この嬉しそうな白木の箱の中で、赤ん坊のように

喚き立ててゐる 僕の声聴いて呉れ給へ」

夜更け 耳をすまし ひそやかな若者の

笑い声を聴こう

石川逸子詩集『もっと生きていたかった 風の伝言』（一葉社、2024年8月15日第2刷）より

▼表紙絵の作者▲



中村萬平

（なかむら・まんぺい）

1916（大正5）年9月28日、静岡県浜松市に生まれる。1936（昭和11）年4月東京美術学校（現・東京芸術大学）油画科に入学し、1941（昭和16）年3月首席卒業。1942（昭和17）年2月1日入営。在学中にモデルをつとめてくれていた霜子と結婚するが、同月11日に華北へ出征。長男・暁介の誕生を知りながら、1943（昭和18）年8月2日、蒙古連合自治政府巴彦塔拉盟武川県の野戦病院において戦病死。享年26。

福島復興の闇

福島イノベーション・コースト構想の内実

和田 央子

福島原発事故からまもなく13年半。この間筆者が目当てにしてきたのは、原発企業やゼネコンが原発事故後始末でさらに潤う、惨事便乗型資本主義の福島版だった。「復興」事業はこれにさらなる拍車をかける。国が「世界に冠たる創造的復興の中核拠点」と喧伝する福島イノベーション・コースト構想（以下、福島イノベ）とはどんなものか。

ハイテク産業で浜通りを一新

福島イノベーション・コースト構想は、次の6つを重点分野としている。

- ① 廃炉・人材育成 廃炉・デブリ取り出しの技術開発、専門人材育成など
- ② ロボット・ドローン 南相馬市ロボット・テストフィールド（※）を拠点に関連企業の誘致
- ③ エネルギー・環境・リサイクル 水素など次世代エネルギーや脱炭素系新技術
- ④ 農林水産業 ICTを活用したスマート

農林水産業

⑤ 医療 放射線を使ったがん治療、創薬など

⑥ 航空宇宙 人工衛星・ロケットなど関連企業の誘致

（※）②ロボット・テストフィールドは「災害対応ロボット」の開発を名目とするが、広報媒体には「陸・海・空のロボット一大実証拠点」を謳う。防衛省陸上装備研究所は「CBRN対応遠隔操縦作業車両の研究」をここで行なうことを公表している。CBRNとは化学、生物、放射能、核の頭文字で、それらによる攻撃を想定したものだ。防衛省の資料には、イチエフ（福島第一原子力発電所）構内の高線量下でがれきを集める遠隔操縦車両の絵の下に「離隔距離20kmを目指す」と記されている。この点について井原聰東北大学名誉教授（科学史、軍事史）

福島イノベーション・コースト構想

FUKUSHIMA ROBOT TEST FIELD

福島ロボットテストフィールド

福島イノベーション・コースト構想に基づき整備された「福島ロボットテストフィールド（RTF）」は陸・海・空のフィールドロボットの一大開発実証拠点です。インフラや災害現場など実際の使用環境を再現しており、ロボットの性能評価や操縦訓練等ができる世界に類を見ない施設です。

本拠地は、南相馬市・復興工業団地内の敷地約1,000㎡、南北約500mの敷地内に「無人航空機エリア」「インフラ構築・災害対応エリア」「水中・水上ロボットエリア」「遠隔操縦エリア」を設けるとともに、浪江町・相馬産業団地内に長距離飛行試験のための滑走路を整備しております。2020年8月、試験用プラットフォームと試験用トンネルにおいて、グローバルロボット・サミット2020のインフラ・災害対応カテゴリー競技が開催されました。

福島イノベーション・コースト構想

東日本大震災及び原子力災害により失われた浜通り地域の産業基盤を新たに創出する国家プロジェクトです。

高炉、ロボット、エネルギー、農林水産等を業種分野とし、産業集積や人材育成、交流人口の拡大等に努んでいます。

<https://www.fipo.or.jp/>

ご利用・お問合せ先

公益財団法人
福島イノベーション・コースト構想推進機構

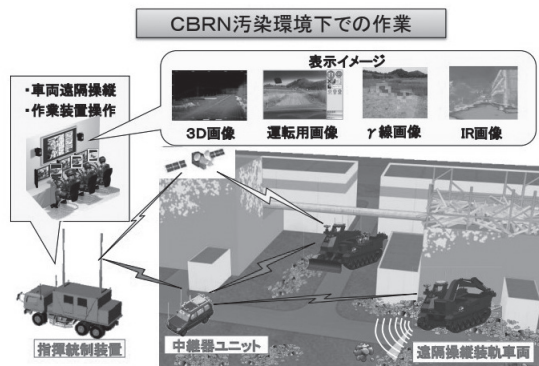
所在地 〒975-0036 福島県南相馬市原区浪江字新赤浜83番 南相馬市復興工業団地内

TEL 0244-25-2473

E-mail: robot.info@fipo.or.jp

<https://www.fipo.or.jp/robot/>

2. 運用構想例



- ・CBRN汚染災害における初動対応
- ・汚染地域内の無人作業車両を遠く離れた非汚染地域から遠隔操縦（離隔距離最大約20kmを目指す）

ロボットテストフィールド（南相馬市）パンフレットより

「防衛省陸上装備研究所資料」より

は指摘する。「がれき処理であれば20km離れる必要はなく、戦場を想定したものだろう。」人の近づけない高線量下という特殊環境はこしかなく、数百年かかると言われる廃炉や除染ビジネスに商機を狙う国内外の企業や、潤沢な研究費をあてにする大学や研究機関は少なくない。

米軍事施設をモデルに

ロボット・テストフィールドのモデルとなったのはアメリカ国立標準技術研究所（NIST）のロボット工学試験施設で、都市災害下の搜索救助、爆弾処理、軍の地上作戦などに使うロボットの性能評価・試験機関である。同研究所HPには「遠隔操作の地上、空中、海上システム」の文字が並ぶ。もう一つのモデルはテキサスA&M大学のディザスターシテイで、オクラホマシティ連邦政府ビル爆破事件を機に造られたテロ・災害対応訓練施設だ。両施設とも災害対応・人命救助を掲げながら軍事訓練を行なう点も共通する。

福島イノベ司令塔「福島国際研究教育機構（FIRE）」

浪江町の駅前に、福島イノベの司令塔となる「福島国際研究教育機構（FIRE）」（以下、エフレイ）が新設される。エフレイの目的は、新産業の創出である。提示されたのは、ロボット、農林水産業、エネルギー、

放射線科学・創薬、放射線の産業利用、原子力災害に関するデータや知見の集積・発信など。福島イノベそのものだ。

「これらは経済安全保障法が特定重要技術として研究開発を促進する20項目と重なっている。これは米国重要新興技術国家戦略2020の引き写しだ。特定重要技術（先進・先端・新興技術）は欧米で軍事技術として扱われている。国の狙いは、これらの

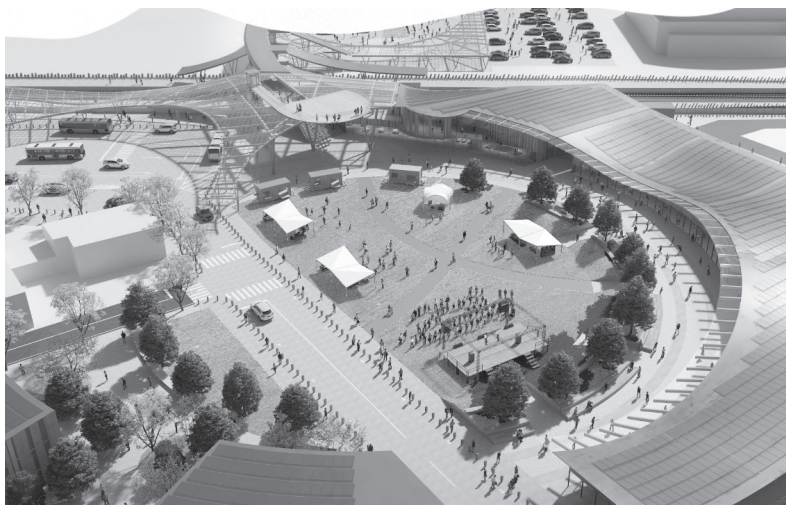
調達を中国依存から脱却すること。エフレイの研究開発は復興予算で先端（軍事）技術開発を推進する先進地域モデルづくりだ。」（井原名誉教授）

・有識者委員の言い値で決定した「破格の待遇」

エフレイ予算は7年間で1千億円（2023年度146億円）と手厚い。エフレイの設置を検討する有識者会議で委員らは、国内外から500人もの優秀な研究者を集めるため破格の待遇が必要だと豪語していたが、フタを開けてみると研究環境整備1億円、研究者人件費1ユニット当たり年間1億円、研究費1ユニット年間1億円と、そっくりそのままの金額が決定した。提案していた田所諭東北大学教授（ロボット工学）は加えて研究者の移動には「ビジネスクラスにグリーン車」などと要求している。

・ゼロ歳児からの人材育成

エフレイでは、連携大学院制度で博士号を取得でき、女性研究者の積極的な採用などを売りにする。女性研究者には子どもを産んでもらい、浜通りの人口増、廃炉、イノベ企業に寄与する人材の供給を期待しており、これを実現するためゼロ歳児から15歳までの一貫校と子育て支援住宅の一体型



エフレイの設置が予定されている浪江町の再開発事業（浪江グランドデザイン〈隈研吾事務所制作〉）

整備を進めている。まず大熊町に「学び舎ゆめの森」が開校、双葉町にも新設の計画がある。

・放射線下に動員される大学生

大学は原発事故後早くから学生を福島に動員してきた。復興庁は2021年から5年間の「復興知（復興に資する知）を活用した人材育成基盤構築事業」を展開、17大学に40億円を措置している。各大学は浜通り15市町村を拠点に原発事故ではなく「復興に資する」調査研究を行なう。



大熊町 学び舎 ゆめの森

原爆投下からフクシマ復興まで

福島イノベのモデルは米国ハンフォードにある。原爆製造のマンハッタン計画を契機に、冷戦時代の核開発に伴う高レベル廃棄物の垂れ流しによって世界有数の核汚染地帯となったが、冷戦終了後、廃炉や除染企業を大量投入したことにより人口が飛躍的に拡大した。これを福島にも導入しようという発想だ。仲介役は石崎芳行元東京電力幹部や、大西康夫元IAEA委員らの率いる東日本国際大学福島復興創世研究所で、「日本版ハンフォード・モデル事業」が復興知事業に採択された。大西康夫氏は、ハンフォードの国立研究所で除染研究に従事。軍事も扱うこの研究所がエフレイのモデルとなった。

核産業の町プルートピア

ハンフォードの労働者の住む町リッチランドには、アトミック・カフェなど放射能の名前を冠した店や商品が溢れる。労働者は高給を得て、高い教育や福利厚生に満足し、核産業に強い執着とプライドを持つ。この町は皮肉を込めて「プルートピア」と呼ばれるが、福島にも複製版が出来つつある。ご当地を描いた映画「リッチランド」がこの夏公開されているので、福



リッチランドの高校の校章には、キノコ雲が使われている

島モデルを知る参考としてお勧めしたい。

福島イノベは、経済安保と軍事研究という、国家が最優先したい分野に莫大な税金を投じ、産官学が吸い上げる仕組みだ。華々しい言葉を並べても所詮は原発事故後始末である。当局は甘言と補助金で若者を集めているが、希望ある人生が蹂躪されることのないよう、私達は監視し、真実を伝えなければならぬ。

（わだ・なかこ／イノベーション・コースト構想を監視する会）

日本原電の闇

山崎 久隆

日本原子力発電（原電）には、深くて暗い闇がある。

震災後に全ての原発が止まった原電では、以後、発電電力量がゼロになった。それにもかかわらず2024年5月16日に発表した24年3月期連結決算は、最終利益が前年比37・8%増の24億円となり、7年連続の黒字だった。一体どういうことなのか。

原電は毎年1千億円近い売り上げを計上している。原発が全基停止し、発電ゼロでも黒字なのは、東京、関西、中部、東北、北陸の大手電力5社が「基本料金」として人件費や原発の維持管理費用などを毎年払っているからだ。このため、東電などが最終赤字に陥ったとしても、発電ゼロの原電の黒字が続くという異常事態になっている。

具体的には、2023年度の売上合計が944億円に対し、東京が404億円、関西が167億円、中部が154億円、北陸が126億円、東北が93億円を支払っている（詳細数値は未発表なので筆者の推計）。全て

各電力会社の電気料金に跳ね返る。

これらは、東京、東北が東海第二、関西、中部、北陸が敦賀2号機の維持管理費用として支払われる。しかし今、これら原発は動いていない。動く見通しも立っていない。維持管理費は累積で1兆4千億円にも達している。

原電が2つの原発を廃炉にする決断をしていれば、このような無駄な支出はなかったはずだ。

東海第二と敦賀2号機は、もはや廃炉寸前である。原電の原発は全て大きな問題を抱えている。

1 東海第二の危険 防潮堤欠陥工事

2018年11月7日、現存する日本で最も古い沸騰水型軽水炉で東日本大震災で被災した茨城県東海村の東海第二原発の再稼働と、20年の運転延長を認める新規制基準適合性審査の審査書が決定された。規制委は、老朽化が進み燃えやすいケーブルを使っているなど、現在の法令基準には合致

しないうえ、東日本大震災で地震と津波に被災した原発さえも「運転してよい」との結論を出してしまった。この原発は18年11月27日で運転開始40年を経過した。この日までに許可されなければ廃炉になるはずだった。規制委は原発の安全性よりも原電の存続を優先した。

その後、安全対策工事中に防潮堤工事で重大な「欠陥」が起きた。

「コンクリート打設不良、鉄筋曲がり、基礎が岩盤に到達していない、安定液の比重が適切でない」そんな重大問題が起きていたのに、あたかも順調に工事が進んでいるように装っていた原電。

原電は23年6月に事態を把握し、工事を中断していた。これを規制庁に報告したのは10月16日。この間、調査と称して隠蔽し続けていた。

17日になって記者会見を開き、安全対策工事中に施工不良が見つかったため6月から中断していると発表した。この先、原因の調査と24年9月までに完成させるとする工事計画に影響がないかなどを調べるとした。

しかし欠陥があった場所は津波対策として新設している「鋼製防護壁」の柱。「鋼製防護壁」は地下約50メートルにまで達する2本の鉄筋コンクリート製の柱で壁を支

える構造になっている。

事態が明るみになったきっかけは、南にある柱の内側の作業をするため掘削作業を行なっていたところ、鉄筋コンクリートに隙間や鉄筋の変形が見つかったことから。具体的には、地下10メートルから40メートルの間の複数箇所でコンクリートが十分に充てんされておらず隙間ができていたほか、柱の骨格となる鉄筋も変形していたという。

原電は、穴を掘ったあとに地盤が変形し、コンクリートがいびつに固まったため隙間ができ、別の作業の過程で機器がぶつかり、鉄筋が変形したと説明した。原電では工法を変更する可能性もあるとして、16日に原子力規制庁に不備を報告している。

しかしこの事件は、内部告発で発覚した。この告発と規制庁による調査指示での掘削がなければ、このまま完工していた可能性があり、その場合は設計通りの強度がない防潮堤が造られていた。

しんぶん赤旗の2023年10月17日記事では、以下の記載がある。

〈原発構内で作業していた工事関係者の証言として、1. 取水口部分の防潮堤の基礎となる「地中連続壁」でコンクリートが正しく打設されていない。2. 基礎の鉄筋が正しい形状で組まれていない。3. 基礎

が岩盤に到達していない。4. 基礎をつくる上での「安定液」の比重が正しく保たれていなかった。などの問題を指摘し原電に説明を求めました。〉

内部告発で明らかになった問題は2点あった。一つ目は原電も認めた南側の柱のコンクリート充填不足と鉄筋の変形だ。しかしもう一つの点については明らかにしなかった。それは、北側の柱で起きているとされる、柱を建設中に地盤内部にあった障害物が何かに干渉したことで、鉄筋が深さ60メートルの岩盤の位置まで達せず、中途半端なところで地盤の中に浮いているというもの。これは強度や安定性に極めて大きな影響を与える。

原電の工事計画が明らかになった段階で、既に地元では軟弱地盤故の工事の困難さが指摘されていた。それが現実のものとなった。柱は津波の衝撃も支えなければならぬが、地盤の中で浮いていたり鉄筋が変形しコンクリート材も不足するなど強度不足なら、たちまち破壊される可能性が高まる。

折しも能登半島地震では、原子力災害と地震、津波災害等の複合災害は住民避難を阻害し、さらに地盤の変状や隆起などで敷地内の施設、設備に甚大な被害をもたらすことが示されている。津波対策の防潮堤の

基礎がこんな状態では、地震と共に発生する液化化で土台が沈下している時に、20メートル級の津波が襲いかかり、防潮堤が倒壊してしまう危険性が指摘される。

他の原発と同様に、東海第二の地震や津波想定は極めて甘い。それに加えて防潮堤などの設備も十分な強度を有していなければ、原子力災害は確実に襲ってくる。

原電は8月23日に再稼働の前提となる事故対策工事の完了時期を今年9月から2026年12月へと延期することを発表した。防潮堤の欠陥工事の対策に時間を要するためだが、現在も工事の方法などについて規制委との認識に大きな隔たりがあり、審査会合での議論が続いている状況だ。この審査期間がどの程度かかるかも見通せず、完工予定は目標に過ぎない。

2 敦賀原発2号機

直下に活断層あり運転不可

敦賀原発2号機（福井県敦賀市・116万キロワット・PWR）は、「真下の断層が動く可能性を否定できず」として、再稼働に必要な新規制基準適合性審査の要件を満たさないと決定された。

過去には断層関係の資料のデータを削除し上書きしていた問題に関連して、新規制基準適合申請の審査が中断されたり、総点

検することを指示されたりと、敦賀2号機については問題が続出してきた。

特に石渡明委員（専門は地質学）は、資料の書き換えや誤った記載が相次いでいるとして「資料が適切なものか、正しいかどうかについて非常に疑問がある」と不信感をあらわにしてきた。

原発は活断層上には建てられない。

国の指針、2006年改訂の「耐震設計審査指針」では、後期更新世（約13万～12万年前）以降の活動が否定できない断層を活断層とし、その上には原子炉建屋など安全上重要な施設は建てられないことになった。

なお以前の「旧指針」では1万～5万年前以降の活動が否定できない断層を活断層としていた。

これまでも、敦賀原発には直下に活断層があると指摘されてきた。直下の断層が、活断層として既に確認されている「浦底断層」と連動して動く可能性があるとして、渡辺満久東洋大学教授ら変動地形学の研究者も2008年から指摘していた。

2014年4月、4人の専門家からなる専門会合は現地調査も行ない「活断層である可能性を否定できない」との意見書を発表した。

これを受けて規制委が2013年5月に

「活断層である」と判断した後にも、原電は「活断層ではない」と反論し、調査結果を追加提出していたため、その追加の再調査が2014年1月に行なわれた。しかし結論は変わらなかった。

そして、2024年に新規制基準適合性審査で初めての「不合格」が決定する。

敦賀原発2号機について原子力規制庁は7月26日に開いた審査会合で、真下にある断層が動く可能性を否定できないなどの理由で、新規制基準に適合していないとの結論を出した。

原発の直下で断層が動けば深刻な事態になることから、新規制基準では再稼働は認められないことになり、敦賀原発2号機の事実上廃炉が決定的になった。

7月30日に開かれた原子力規制委員会の会合で報告され、審査会合の結論を委員会としても受け入れた。

この結論は実際には以前から出ていたものである。

敦賀原発は200mほどの場所に「浦底断層」という活断層が走っており、もともと立地不適と言える場所だが、以前は断層評価が甘く、原電は浦底断層を活断層と考えていなかった。

その後の調査で浦底断層は約4700年前に活動した第一級の活断層であることが

わかった。

東日本太平洋沖地震の後に、専門会合により浦底断層の運動に伴い動く可能性がある断層が原子炉直下にも達している可能性があることが明らかになり、改めて再評価を行なうことになった。

敷地内の断層について、旧原子力安全・保安院による「耐震バックチェック」の一環として、評価の妥当性について、専門家からの意見聴取、有識者会合が設置されていた。そこで「浦底断層の動きにひきずられた可能性がある」として、活断層に伴う活動があることを示していた。これが2014年の有識者会合による意見書であり、断層運動の可能性が否定できないことから、再稼働できないと結論づけられていたのである。

この見解を不服として、原電は再度、設置許可変更申請書を提出し、強引に審査を再開させてきた。そのために、科学的根拠も不確かな「光ルミネッセンス分析」などを持ち出し、K断層は活断層ではないと主張するなどしていた。

そして発生したのが、再稼働を強引に進めたい日本原電による文書偽装事件である。

一連の審査会合では、過去に国に提出した書類を勝手に書き換え、あたかも最初か

ら活断層ではないと評価してきたかのよう
な文意に書き換えるなど、多数の偽装が見
つかった。これでは審査できないと、審査
が中断した。その後、規制委は原電の姿勢
が「改善された」として、審査を再開させた。
ところがその後も、原電の提出した書類
には100箇所以上の間違いが見つかるな
ど、審査に耐える状況ではなかった。23年
4月、審査は再度中断した。

規制委はデータ管理や審査体制に問題が
あるとし、原電の社長を呼び出して資料を
出し直すよう求めた。その際に山中委員長
は「これが最後だ」と述べた。誤りが続け
ば審査の打ち切りも示唆した。通常の許認
可ではあり得ないような「事業者に手厚い」
処置だった。

審査結果により、この原発は今後動かす
ことはできない。しかし、この審査会合の
結果を受けて、原電の村松衛社長は「廃炉
は考えていない」として、さらに審査を求
める考えを示している。

この姿勢は何ら不思議なことではない。
これまでの原電の姿勢と、その経営状況か
らみても、こうした主張を続けていくこと
になるだろう。しかし規制庁は、再審査を
認めてはならない。

規制委の山中伸介委員長は審査不合格の
審査書決定後の記者会見で次のように述べ

た。

「審査の申請から去年まで8年弱のあい
だ、十分な審査ができる状況になかったと
いう異常な状況があった。非常に多くの申
請書の間違いやデータの書き換えなどが
あって、まともな審査ができた期間は非常
に限られていた」と指摘し「この1年、論
点を絞ったことで審査が進み、技術的に判
断を下せたと思っている」原電が審査を求
めていることに対しては「事業者の申請は
否定しない」が「再申請するならば、問題
の断層だけではなくて、敷地全体の断層の
リスクをきちつと評価をしてほしい。非常
にたくさん断層がある(100以上)ので、
その活動性を否定することはたいへん困難
なものとは推察する」。(8月28日NHKニュー
ス「敦賀原発2号機 再稼働認めず初の不合格判断
原子力規制委」より)

3 消滅する「経理的基礎」

原電の原発は、現在、全て止まっている。
原発を保有する会社には、経理的基礎す
なわち財政力が問われる。「原発の安全性
を確保し、かつ継続して運営するに足る財
政的基盤があること」と定義できる。「経
理的基礎の有無」は、原発の許可条件の一
つである。しかし発電設備が2基の原発し
かない原電で、そのうちの1基が稼働不能

状態になった。経理的基礎は消滅している。

このまま原電が敦賀2号機を「再稼働申
請中」として基本料金を電力会社に請求し
続けると、消費者の電気料金は1ワット
も電気を生まない原発の費用として年間
400億円余りを原電に支払うことにな
り、これでは「再稼働詐欺」だ。

欠陥工事が明るみに出た東海第二と合わ
せて、毎年900億円を超える電気料金を
吸い上げるためだけに存在し維持され続け
る原発。

もはや一刻も早く、2基とも廃炉にする
べきだ。

東京都も、東電株主総会で電気代を抑え
る株主提案をしていたが、電気代が高いと
思うのなら、まず電力5社に対して原電
に支払っている原発維持管理費用の打ち切
りを要求するべきである。

(やまざき・ひさたか／たんば舎共同代表)

「刀を差さない」 国家の誕生から 「われⅡわれ」のサラダ社会へ

——小田 実没後17年記念講演会

玄順恵

21世紀初頭から、日本政府は平和憲法を
ないがしろにし、それまで築いてきた「戦
後の価値」を次々となぎ倒してきた。

その手法は用意周到、本質をぼかしてす
り替え、欺瞞の美辞麗句をあやつること
で数々の戦争法案を可決していった。

2004年に国会で議決された「国民保
護法」を皮切りに「安保法制」「安保三文書」
の改定、敵基地攻撃能力の保有などなど。
かつてナチ・ドイツが「ワイマール憲法」
を棚上げにして「全権委任法」を成立させ、
着々と政権を掌握していった過程を見るよ

うだ。

この7月、小田実没後17年記念講演会を
兵庫県芦屋市で開催した。

タイトルは〈混迷する現代に『随論 日
本人の精神』が問いかけるもの——「刀を
差さない」国家の誕生から「われⅡわれ」
のサラダ社会へ——〉。

日本の「戦後の価値」は、自由と民主主義、
そして平和主義にあるが、小田実とは、戦後
日本の平和主義を「刀を差さない政治」と
呼んだ。

——戦後の日本人の「刀を差さない
心・精神」の形成は、戦争と平和の問題
にかかわってだけで重要だったのではな
い。長年「刀を差した政治」（経済、文化、
社会、すべてが本質的に「刀を差した」ものだっ
た）の重圧の下にあった日本人が、敗戦
によって重圧から解放されたあと「刀を
差さない心・精神」を得ることで、彼ら
がようやくただの「切り捨て御免」の対
象でない、ただの召集状を送りつけられ

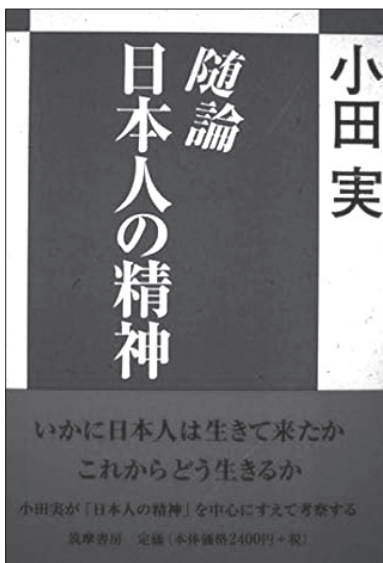


るだけの相手でない、人格とともに人権
をもつ人間になったことだ。ことばを変
えていえば、いつも「する」側にいるの
ではなくて、「される」側に立ちながら「さ
れる」側の政治を行う主体になったこと
だ。

『随論 日本人の精神』（2004年、筑摩書房）より

アジア版「NATO」をめざすアメリカ
のインド太平洋戦略の下、米軍の最重要
パートナーの一部として自衛隊を位置づ
けた日本政府は、沖縄を、そして日本を再び
戦場に作り変えようとしている。

戦後、「刀を差した政治」の重圧から自
由になったはずの私たち市民は、今、どれ
だけ「主権在民」を生きているのか？ 『随
論 日本人の精神』を読みとりながら共に
考えたいと思い、集会を企画した。講師は



安田敏明氏（一橋大学大学院教授）。

『随論 日本人の精神』は、ちょうど「九条の会」が結成する2004年に出版された。一方では、第一次安倍政権が「改憲」に向けて大きく動き出した頃だ。20年後の今の日本の右傾化の極みを目のあたりにして、著者の「いかに日本人は生きて来たか、これからどう生きるか」という言葉ほど示唆深いものはないだろう。

「随論は、考えのおもむくままに自由に筆が動いて、ことを論じる」、また日本人の精神とは、日本人の「内部を満たし行動を支える基になると考えられるもの」、そして「日本人」と呼ぶのが適切な人間集団とは何かを小田は的確に定義する。特筆すべきは、世にいう「日本人論」とはケタが違う「小田実の精神」論であることだ。書いた理由は、「阪神・淡路大震災」を経験し、大災害はその力で一切の虚飾を剥ぎ落して、事物の本質を剥き出しにすることを実感したこと、そして自分の戦争体験の記憶をよみがえらせたからという（折しも「日本会議」結成時期と重なる）。

まず自分の日本人認識に「ヤマトダマシイ」や「武士道」はどのようにしてあるのか、さまざまな歴史上の人物との歴史観の相違を敬意もからめて掘り下げる。

1932年生まれの小田は、「天皇制近

代国家」の下、日清、日露戦争を勝ちぬいた大日本帝国の軍国主義教育を受けた世代だ。その少年時代に学んだ「ヤマトダマシイ」の論理と倫理とは、万世一系の天皇を戴いて天に代わりて不義を討つ「正義の戦争」を推進する勇者は、戦場での「名誉の戦死」とをとげること。つまり、戦争、正義、天皇、勇氣、死の五つのことで、本居宣長の「もののあわれ」にみる本来の「ヤマトダマシイ」など教わったことがなかった。

「武士道」についての考察では、「武士道」のもつ表と裏の欺瞞性をはぎ取りながら、その「狂」と「美」に対して根本的な疑問を示す。とりわけ三島

由紀夫の自決やそれに共感した一部の学生運動に対しては、非暴力の市民運動を続けた小田にとって耐え難い論理と倫理の展開だった。学校の卒業は運動の卒業で、参加の継続は問題ではなかった。両者ともに「刀を差した」心・精神・政治に親和的だった。18世紀の「武士道」の教本、『葉隠』の理解は圧巻である。

武士が隅田川の小舟に乗って涼みながら



「切り捨て御免」と俠客を斬り、目撃者の船頭まで斬った後、何もなかったかのように平然としているその低劣な人間性のエピソードを取り上げ、自分は武士の側に立つより無残にも殺された「船頭の立場に立つ」と宣言する。暴力を徹底して拒絶し、国家像としては「私は日本の国のあり方を……『平和主義』の実践を行なう『良心的軍拒否国家』であるべきだ」と主張する。「殺

される」側Ⅱ「される」側に立つという姿勢は、ふつうに暮らすひとびとの人間としての常識に立つということだ。

強者の「する」側の政治に対して弱者の「される」側の政治が可能になったのは、敗戦後、「刀を差さない」国家の誕生によって「される」側が政治の主体になったからだ。「される」側は「する」側の政治にどうしても巻き込まれるが、巻き込まれながら巻き返すことが「主権在民」を生きることである。それを実践した一例が「市民Ⅱ議員立法」運動だ。阪神・淡路大震災直後、



行政の「土建屋政治」Ⅱ「する」側の政治に対して「棄民」の「される」側が立ち上がり「市民Ⅱ議員立法」運動を始めた。これは被災者に対して「生活再建援助法」を作るためだが、この法案は後に可決され憲政史上初の市民発議による恒久法となった。

ここに至るまでには小田の射程の長い歴史への視点があった。日本は鎌倉時代以来「刀を差した政治・精神」によって主導されたが明治維新後も続いた。侵略戦争で敵を「殺し、焼き、奪う」ことで自らも「殺され、焼かれ、奪われる」結果になった。この惨禍によってもたらされた「平和主義」とともに大切なことは、武力を放棄する憲法九条をもつ日本国憲法によって「刀を差した」政治・精神から「船頭の立場」が解放されたことだ。

戦争体験によって得た「平和主義」を小田は「体現平和主義」と呼ぶ。そして戦後の日本歴史はさながら「体現平和主義」の抵抗の歴史でもあれば、衰退の歴史でもあった感があり、今は最後の砦のようにして「体現平和主義」の力が問われている時のようだ」と述べる。「体現平和主義」は体験者の消失とともに薄れる弱さをもっている。

安田氏はそのことを憂え、昨今の新手の

学者による「変質する平和主義」や「したたかで功利的な平和主義」といった言説に疑問を呈す。憲法前文と九条を維持しつつも、アメリカの戦争への貢献・協力は例外的に認める矛盾を解消しないことが「したたかで功利的な平和主義」なら、それは「平和主義」かと。「巻き込まれながら巻き返す」というもう一手が求められているのではないかと、そして「体現平和主義」の継承があまりにも「体現」に頼りすぎ、個人の戦争記憶、体験の集約や体系化、社会化が不十分、ただ解り易い、ざらざらとした感のある「物語」だけが横行する環境を危惧する。

「体現平和主義」の継承の難しさを指摘しながら渡辺良三の『歌集 小さな抵抗』（岩波現代文庫、2001年）を紹介。1922年生まれ、学徒出陣で中国戦線に配属後、中国人捕虜を銃剣で突くという刺突訓練の時にキリスト者として捕虜殺害を拒否した。それゆえに凄惨なリンチを受けたが、その一部始終を含め戦場の日常と軍隊の実像を約七百首の歌に詠み、復員時に持ち帰った。1992年、国際平和協力法（PKO）が制立した時、中国で虐殺された犠牲者の凄惨な姿が夢に現れ心をさいなみ続け、迷ったあけく私家版として初公表。懺悔の心とともに第二次世界大戦中の全てを目を背けることなく後世に残した。

彼は明治近代国家の国民皆兵の結果、「船頭」が「刀」を持たされ兵士となった一人だ。徴兵拒否をできなかった自身を省りみ、私達は加害者であり被害者でもあるが被害者意識は増大しても、加害者に対する想像力は皆無に等しい。もし、日本人の被害者意識をいうなら「原爆被害よりもむしろ中なる天皇という権力を頂点とした支配層、特に旧軍部、官僚特に、司法官僚、日本資本主義資本、天皇一族等によって、あの第二次世界大戦の塗炭の苦しみを舐めるにいたったことを意識すべきである」と述べている。

「刀を差した政治・心・精神」は、加害者性をかばいながら被害者に対する想像力を切り捨てる。生前に親交のあった司馬遼太郎の歴史観に対して初期とは違う晩年の彼の「国士」ぶりへの変化を残念に思う小田の指摘も、この被害者への歴史的想像力の不足であった。その点、徳富蘇峰や藤原惺窩に軍配をあげ、関東大震災時の清水幾太郎の視点にも言及する。関東大震災時の朝鮮人らへの虐殺は、「船頭」が「刀」をもって「狂」をふるった一例である。

被害者への想像力は、歴史に対して「過去の克服」作業がなければ立ち上がって来ない。

その努力を不断に継続したのは旧西ドイツ

ツだ。1968年、学生運動の導火線を引いたひとつに「ぼくの父さんは戦争中に何をした？」の言葉だった。ある医学部の学生が自分の父親がかつてのナチの医者だったことを知り過去の戦争の罪をあげき始めた。当時の大学にはナチ政権に協力した医者が多かったため、その学生はどの大学にも就職ができなかったが、その後にくる学生運動はついに大学、社会、政治を変える原動力にまで広がった。そして後に「歴史論争」まで発展した。彼らは言う。「遅れてきた近代国民国家」のドイツには、官憲国家の国民はあっても自立した自由な市民は育たなかった。その弱さゆえにナチ・ドイツを生んだのだと。

「近代国民国家」の規範をドイツに学んだ日本を今一度、省察してみてはどうか。異質な価値をもつ個と個が互いに尊重しながら対等・平等につながる多様な社会の創生。

——「刀を差さない」国家の誕生から「われわれ」のサラダ社会へ——と小田実は今も私達に問いつづけている。

2024年9月23日

(ヒョン・スネ／画家)

●バッジ・シールのご注文は

事務局にFAX、メール、はがきで必要な品物と数量、お名前、ご住所、電話番号・FAX番号をお知らせください。頒価・送料を記した払込取扱票を品物と共に送りいたします。

「殺すなバッジ」を再製作しました。

注文先 市民意見30の会・東京

市民意見広告運動

TEL 03-6434351-2030

FAX 03-6434351-2031

* 「殺すなバッジ」の頒価

・大 250円 ・小 220円

* 「九条実現バッジ」(絵柄はA・B)の頒価

・大 300円 (10個以上、1個250円)

・小 250円 (10個以上、1個220円)

* 「九条実現シール」

(大・中・小シールの3種で1枚)の頒価

・1枚 300円



「国防最前線」の島にされた与那国島

竹内 光浩

2008年の夏、私は多良間島にいた。沖縄の各地に伝承された組踊りとは微妙に異なる組踊りを伝える多良間島の八月踊りを拝見するためである。多良間島の二つの部落が一日目は日を違い、最終日は同時進行で二箇所の会場で踊られる。普段はほとんど人の姿に出会うことがない多良間島だが、この時だけは島も沈むかと思うほどの人出となる。私も数少ない島の宿に泊まり三日間を過ごした。

その折のことだ、朝から晩まで続く八月踊りの熱気も冷めやらぬまま、宿に戻り、庭先で飲み会の延長戦をやっていた。そこに祭り見物には相応しからぬメンバーがやって来た。まず目付きが尋常でなかった。

一緒に飲んでいるうちにお互いの自己紹介となった。彼らは陸上自衛隊員だった。多良間島に駐屯地を作る事前打ち合わせに村役場に挨拶に来ているとか。私が沖縄先島の自衛隊軍事基地問題を肌身で感じた最初の出来事であった。

若い自衛隊員はイラク帰りだった。20

03年の小泉政権下で始まった自衛隊の海外派遣のメンバーの一人だった。彼だけがとりわけ人間らしからぬ目付きをしていた。強いて言えば映画『地獄の黙示録』を彷彿とさせる目付きだ。口数も少なかったが、もう一人の隊員は喋りたそうだった。彼はイラク帰りではなかった。雰囲気悟った上官と思しき人物がそれ以上のおしゃべりを差し止めた。しばらく飲んでから彼らは部屋に引き上げて行った。

その後残った祭り見物の面々で、自衛隊基地がほとんどない宮古八重山諸島に、自衛隊は基地を本気で作る気になっているのか、と呆れ顔で話し合った。多良間村役場では彼らは歓迎されたようだった。

現時点多良間島には自衛隊基地はないが、宮古島駐屯地から多良間島に渡り訓練を展開しており、宮古島で反対運動が続いている人たちは当然ながら問題視している。

過疎化する全国の市町村は何も多良間島

だけではない。自公政権の悪政で全国の市町村合併が進み、公務員が減り、今まで可能だった行政サービスが不可能になっている地域は全国にある。過疎地の問題に正面から取り組み抜本的な手立てを講じるのではなく、そうした地域に原発や軍事基地を押し付けるのが自公政権の方針だ。

事態は私が思う以上に急速に進んでいった。その後、与那国島に自衛隊基地らしきものが出来そうだとニュースを時折東京でも耳にするようになった。

与那国島に自衛隊基地建設がすでに始まっていた2015年に突然、与那国島に加えて多良間島ではなく宮古島に自衛隊基地が増設されることを知った。その場所はずであつた航空自衛隊通信基地の拡大ではなく、全く別の場所に新たな自衛隊基地が作られるということだった。最初に候補に上がった地域は、私もよく知っている場所であり、宮古島に行った時は必ず訪れる場所だった。それから何度か宮古島に行き、地元のアグたちと泡盛を飲みながら自衛隊基地問題を話し合った。中国の脅威をあげたのは一人だけだった。みんなまだ自衛隊基地については半信半疑だった。

与那国島の自衛隊基地建設は始まってしまっていたが、自分たちとは関係ないとい

う感じだった。私自身も八重山諸島についてはほとんど知らなかった。そこで丸山眞男手帖の会の川口重雄さんがその頃八重山諸島に出かけていたことに気付き、石垣島や与那国島の人を紹介していただいた。そしてそれぞれの島の方たちと連絡を取り、石垣島そして与那国島に向かった。石垣島では戦争中のマリア地獄を語り継ぐ方にお会いし、与那国島ではイソバの会の稲川宏二さんにお会いした。与那国島ではすでに自衛隊基地建設が始まっており、南牧場の一角に基地のフェンスが続いていた。牧場で放牧されている馬たちが馬面をフェンスに押し当ててフェンス沿いに歩いていた。

彼らの生活場所に戻ろうと馬は必死なんですよと稲川さんから教えられた。基地から東崎に向かう山の上にはリーダーが何基も作られていた(写真①)。

与那国島でなぜ基地反対運動が負けてしまったのか？ 稲川さんによれば、運動が与那国島だけに限られてしまったことが大きかったとのこと。確かに私自身も沖縄島から宮古島までは関心があったが、石垣島さらには与那国島まではさほど視野に入っていなかった。

そこで、宮古島、石垣島、与那国島を繋ぐネットワークを市民レベルで作れないも



のかを考えた。

宮古島に戻り、島で反対運動を始めていた人々に会い、ネットワーク作りを訴えた。

沖縄・読谷では当時辺野古をはじめとする山原でカメラを回していた三上智恵さんにお会いして三時間ほど先島の話をした。

今年、三上さんが先島の基地問題をドキュメントした『戦雲』が封切られた。宮古島の仲間たちと、ともかく少人数でもいいから島々を繋ぐネットワークを作り、運動を広げて行こうという話が進んでいった。最初は「南西諸島ピースネット」というような名称で、共同代表には与那国島の猪股哲さんと私がなった。

翌2016年4月はじめに稲川さんが与那国島の訴えをするために国会前の集会に



やって来た。私もお手伝いの意味でマイクを持った。お嬢さんの大学入学式を兼ねての上京だった(写真②)。与那国島に戻る前に大阪の実家に顔出しすると言うので、新幹線の時刻まで東京駅の地下街で酒を酌み交わした。基地が出来てしまった与那国島でこれからどういう運動が可能かというのが話題になった。

私はまずはソフトの方面から入ったかどうかと提案した。与那国島で連続コンサートのようなものを繰り返し返し、それを踏まえて全国に与那国島の実情を訴えて行くとい

うものだった。

無論そんなことで事態が動くわけではないが、東京のようにデモをするわけでもない基地反対運動である以上、出来ることは限られていた。ともかく年内には私が仲間を連れて与那国島にコンサートをやりに行くから、ぜひ島の人たちを集めてもらいたいと話した。なんでも出来ることから始め

ようということに。

それから一週間後に与那国島の猪股さんから連絡が入り、稲川さんがダイビングのガイド中に亡くなったとのこと。我が耳を疑った。

稲川さんは亡くなってしまったが、与那国のみなさんの反基地の闘いは終わらなかった。島の西端に位置する久部良部落の東側の山の上には軍事レーダーが林立している(写真③)。当然ながら高周波の電波障害が問題になった。レーダーの眼下には保育園、小学校、中学校がある。電波障害を懸念して島を離れた人もいる。

今その久部良から東に伸びる道路の先に

ある比川部落で新たな海上自衛隊軍港建設の話が持ち上がった。現与那国町長糸数健一の提案である。比川部落カタブル

浜の西に隣接して貴重な樽舞湿原が広がる。樽舞湿原が破壊されて海上自衛隊の軍港が出来れば自然破壊はもちろん、実質的に東西を繋ぐ一般道は北部を迂回するしかなくなる。湿原の東側には小学校もあり、おそらく廃校になるだろう。湿原の西方は元は馬の放牧地であり、今で

すら自衛隊基地建設によって住処を奪われた馬たちが車道を塞ぎ車が立ち往生するのは日常的なことである(写真④)。湿原を軍港にすることは与那国全島を航空母艦にして、島民を追い出し、自衛隊関係者だけの島にすることである。

すでに町議会では有事の際における全島避難の青写真が本気になって論じられている。与那国島だけではなく、石垣島、宮古島も同様である。

先島の全島民・観光客ほぼ12万名を九州各県に疎開させる案がすでにメディアで笑い話ではなく提示されている。前の大戦で沖縄島から長崎への疎開児童を乗せた対馬丸が撃沈され1500名ほどの犠牲者を出した。政府が起こした戦争で戦争には全く責任がない子どもたちが犠牲になった。今、与那国島、石垣島、宮古島の首長はこぞってこの愚挙を繰り返そうとしている。

事態がここまで進む前に、島民たちはただ傍観してただけだったのか。そうではない。与那国町は台湾を遠望する国境の街の利点を生かした経済特区構想を早くから打ち出していた。1982年には台湾の花蓮市と姉妹都市提携をして、今でも与那国の中学生は修学旅行で花蓮市を訪問する。その与那国町が具体的なヴィジョンを提起



与那国「自立・自治宣言」

- 一 私たちは、島興しと地域づくりの主体が一人一人の町民であることを確認し、21世紀の与那国が「自立」と「自治」の島として、さらなる発展を遂げるよう、ここに地域の総力を結集する新しい指針を明らかにする。
- 一 私たちは、「どうなんちま」の豊かな自然と暮らしを守り抜き、固有の文化を築き上げてきた先人に心から感謝の意を捧げ、その歴史に裏打ちされた知恵と自立・自治の精神をわれわれ一人一人が引き継いで行くことを誓う。
- 一 私たちは、安心・安全な島づくりと生きがいのある豊かな暮らしの実現に向けて、いかなる困難があろうとも、「どうなんちま」に根を張る「どうなんちま」として、「まるんな」(一九)となって立ち向かい、これを次代に継承することを誓う。
- 一 私たちは、国境地域の孤島であるが故の「離島苦(しまちやび)」を克服するため、島の医療・福祉・教育等の基礎条件の向上や地域産業の振興に不可欠な「光ケーブル」の敷設など、情報通信網の基盤整備をめざす。
- 一 私たちは、すでに友好関係を深めている花蓮市をはじめとする台湾など、近隣・東アジア地域と一層の友好・交流を推進するとともに、相互発展の道を築き、国際社会の模範となる地域間交流特別区の実現に向け努力することを誓う。
- 一 私たちは、東アジアの平和維持と国土・海域の平和的保全等に与那国が果たしてきた役割への正当な評価のもとに、日本国民としての平穏な暮らしを実現しながら、平和な国境と近隣諸国との友好関係に寄与する「国境の島守」として生きることを誓う。

2005年3月
沖縄県与那国町

したのは2005年のことだった。しかし当時の小泉政権は与那国町の提起を一顧だにしなかった。当時の各省庁の回答はネットで読めるが、全て理由にならない理由で与那国町の提案を却下している。2005年3月に発表された「与那国・自立へのビジョン」の冒頭に『与那国「自立・自治宣言」』が掲載されている(写真⑤)。格調高い宣言文だ。本文には「与那国特区」「自由往来」の実現(与那国⇄台湾直行便、国境離島型開港)や島民の自治を重視した「自治基本条例」の制定、その活動基盤となる「自治公民館」についての展望も描かれている。まさに民主主義の学校である。

「ビジョン」作成委員には現在、憲法を

廃止して日本を戦争が出来る国家にすべきだと豪語する現与那国町長糸数健一の名前が「農家代表」ということを入っている。糸数町長の豹変には彼を以前から知っている人ですら啞然としている。

この「ビジョン」が小泉政権によって2007年には早くも島内保守派の人々で与那国防衛協会が作られ、あつという間に自衛隊基地誘致が決まってしまった。当時沖縄島では普天間基地の名護市移転をめぐる日米政府が暗躍している最中であつた。小泉純一郎から安倍晋三への時代に与那国島では自衛隊基地誘致運動が始まった。

は会ったこともない他国の人々を殺すことが仕事である。

米軍(海兵隊)ではなく自衛隊だからと誘致に賛成した多くの島民の前に、今年5月に好戦家で有名な駐日米大使が異例の訪問をし、7月には米軍海兵隊のリーダーが与那国島に運び込まれた。

与那国島民はとんでもない過ちを犯してしまった。しかしそれは彼らだけの責任ではない。彼らの声を一顧だにしなかった小泉純一郎・安倍晋三政権の軍事大国化政策、その政権政党をほぼ戦後一貫して支え続けてきた日本全国の有権者こそが、その責めを負うべきであろう。

2024年6月、私は仲間のミュージシャンと共に与那国島を訪れ、島内の全小中学生向けと島民向けの連続コンサートをさせていただいた。今は亡き稲川宏二さんと10年ほど前にした約束をようやく果たせた。いや実際はまだ果たせてはいない。音楽その他の文化を通して、与那国島が軍隊が不要な平和の島に戻ってこそ、彼との約束を守ったということになるだろう。

が、僻地投票の不透明さもあり、自衛隊基地誘致反対派が勝つことはなかった。与那国島は今でも歯医者に通うには飛行機で石垣島か那覇に行くしかない。『ドクターコトー』のモデル島ではあるが、現在医者とは二人だけである。自衛隊基地が誘致されたが自衛隊は病院を作ってくれなかった。国境を守るはずの自衛隊は国境に暮らす人々の生命健康を守るわけではない。彼ら

(たけうち・みつひろ／古民家くまから洞亭主、元専修大学兼任講師)

79周年追悼「山の手空襲」を語りつぐ集い

語りかけ得る「きみ」、語りかけ得る現実をめざして

——パウル・ツェラン

佐藤 いづ子

プログラム

プログラム、お話、アンケートの声、後日届いた高校生の感想、ピアニストからの手紙のいずれも一部を紹介したい。

2016年の第一回から表紙には二つの文を入れた。写真を掲載するが読むのは難しいと思う。

の体験と祈りの継承をと挨拶された。粗にして洩らすこと大なる報告に、その一日の成立への感謝を込め、以下、当日の

7月13日(土)、港区立青南小学校体育館を会場に―「山の手空襲」79周年追悼・朗読とピアノの集い―を開催した。……朗読とピアノコンサートを……と夢想に近い発案から2年、青南小学校と同PTAの迅速で具体的な協力を頂き叶ったものだ。

期を合わせてウイーンから帰国のピアニスト、青南小学校4年生3名、青山学院初等部5年生4名、同高等部生徒会と放送部が朗読と司会、録音・撮影は専門の知人が応諾、会場設営、案内介助等、十余名の支援者が対応、担当毎も全員での通しもありハールは不可能。当日朝に時間差集合、交々持ち場に必要な準備をしながら、ちらと会場の埋まり具合に目を遣りもして、話す人、聴く人を待った。名前無く、それぞれに無償の役割に立ち、生徒引率の教員方は学期末の一日を当て、必須のピアノ調律は、実行委員の旧友が抑えた費用で請け負ってくれた。130人近い参加者があった。

二部には港区長も見え、閉会時にこの地

「山の手空襲」79周年追悼 朗読とピアノの集い

日時 2024年7月13日(土)

開場 12:30 開会 13:00

場所 港区立青南小学校 体育館



(続表参道が燃えた日―山の手大空襲の体験記より)

佐藤 銀重

……悲惨な戦争は二度と起こしてはならない。
……焼けた櫓は参道でのすべての事象を知っている
……でも教えてはくれない。
……毎年春になると青い芽が吹き冬になると落葉する。
……戦災で何本かを残し、焼かれて植え変えられた。
……焼け残った櫓は参道でのすべての事象を知っている

1945年5月25日夜、赤坂、青山、表参道、原宿、渋谷の一带がアメリカ軍による焼夷弾と爆弾の投下で焼きはられ、多くの人が傷つき亡くなりました。「山の手空襲」といわれる戦災の事実を伝えようと、この地域の空襲体験者と後の世代の人たちが協力して、「山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会」を作りました。当委員会は、次の二つを活動の趣旨として、2016年より集いを開催してきました。

- ・山の手空襲の体験を次の世代に伝えていくこと。
- ・歴史から学び、戦争を二度と起こさないようにすること。

2020年、新型コロナウイルスの流行で集いに替えて始めたことですが、5月25日当日、道行く人たちに慰霊碑への献花を呼び掛け交流する活動も続けています。近隣の小学生のみなさんが毎年来てくれます。

主催 山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会

協力 港区立青南小学校・同校PTA

連絡先 070-6528-5622(烏山)

お話の内容

泉宏さん（94歳） 一緒に消火をしていた父とはぐれ、中学生だった自分は逃げ続けたが、父は戻らず遺体もない。自分を探して火にまかれたのでは……との思い拭えず、思い出すのが辛い体験を語ることを止めた時期もあったが、「伝えるのは、生き残った者の務めだ」と言う先輩の声に再開した。長兄はビルマ（ミャンマー）で戦病死。「戦争で死んだ人は帰って来ない。戦争で孤児になった人達を思うと苦しい。」

山形美智子さん（94歳） 母や姉と必死で逃げた。翌日、転げた門柱で家跡を確認した。表参道銀行前で、二階の窓までも重なった遺体を鳶口で引き下ろす時、青い火がポオツと立つては消えしていた。戦争をしてはいけないのに、どうして上の人が分からないのかと何年も考えた。

中村道子さん（94歳） 諏訪に学校疎開、空襲当夜を知らないが、家は焼かれた。勤労動員で戦闘機の部品を作った経験から、戦争の加害にも関わった最後の世代と思っている。戦争は、食べる自由、学ぶ自由を奪った上に命を奪う。その恐ろしさを知り、二度と厭だと心底思うことが一番の供養と

思う。

上記の3人の方は、ステッキ、押し車で歩を支え、ご家族に介添えされて小学校の特別授業に来てくださる。いつも、誰に向かってでもマイクを握りしめ、それでも弱まりがちな声を絞って話される。この活動を牽引された佐藤銀重さん、比留間柏子さんは当日参加を見合わせられた。

アンケートの声（何人かの分をつなげた）

辛い体験を言葉にするのは、私達が思う以上にキツイ作業だ／空襲のすさまじさ、恐ろしさ空しさが伝わり、実際の体験は、これほど苦しいものなのだと分かった／涙で聞いたことを、我が子に話して聞かせ、胸に刻みつづける／どうしても語りついで行かねば大変になる、と非戦の思いが、お三方のお話にこめられ絶対に戦争への道を進んではならないと、若い方々の胸に響いたと思う。

●高校生の感想

戦争から目を背けていいわけがないとわかった／教えられて、「戦争はダメ」は固定観念としてあったが、お話に心の底から戦争はダメだ、絶対になくさなければならぬと私の意思になった気がする／戦争を

経験してはいないが、戦争を知っている世代として今を生きる私たちが向き合う国際社会への日本の貢献、戦争をやめざる主張の大切さを痛感した／自分の想像を超える残酷さを学んだ／「この出来事を忘れずに未来へ繋いで欲しい。戦争を二度と起こしてはいけない、命があることは当たり前ではないことと覚えてほしい」——三人のかたのお話が心に響いている／残酷な歴史であり大切な思いであるものを守って行く。

●朗読について

内容をしっかり理解してよく練習。真剣な気持ち、感情のこもった大きな声は、心に染みて情景が浮かぶようだった。子供の声は、子供たちにより深く入ってくると、同伴していた我が子たちを見て思った／彩りのように思われた「朗読」が大きな意味を持っていた。継承の希望が見えた。

●ピアノ演奏について

お話の余韻にスッと染み込むような選曲はすばらしい／美しい一つ一つの音が訴えかけて波立つ心を鎮め、悲しみを乗り越えて未来へ向かって行く。力強くもある、思いのこもる演奏／戦争の後、人を癒すのは実は音楽ではないか。

ピアニストからの便り
プログラムにあった佐藤銀重さんの詩と
集いのコンセプトに賛同し、演奏の機会を



いただきました。ショパンとブラームスの
小品数曲、憤りか怒りか、どうにもならな
い衝撃、苦しみに、心張り裂けんばかりに
募る不安を表現しているような曲を選び、
その後は、愛するものへの追憶、大

きな喪失への悔いを清夜の想いに辿
るような、穏やかな静かな曲を揃え、
けれども世界には、こんなにも素敵
な瞬間があると、魂が天に昇ってゆ
く情景を思い浮かべて演奏しまし
た。老若男女、幼児まで多くの方が
集う体育館を、曲の静けさに吸い込
まれるかに静寂が包み、みなさんが
一言、一音も逃すまいと聴いて居ら
れると感じ、私も丁寧に音を出すこ
とができました。音や光が、その場
の空気と物質に染みわたる感覚、静
けさを、そこに居た一人でも多くが
共有し、空襲に巻き込まれた方々を
想う、鎮魂の瞬間を共にできたのな
ら、大変有難く思います。貴重な時
間となりました。

* * *

肯定的な声ばかりがあるところ
に、こうした活動の課題も見えてく
る。何処からも批判を受けないこと
で、その在り方を検証する機会は少
なく、継続が第一に置かれる。「継

続は力」の言を引くまでもなく、それが主
目的でもある。しかし……と小石を投ずる
きっかけになるうかと、この報告文の題を
決め、次の二つの「伝える」を加えたい。「不
特定単数」を思う。

——母は横浜で家が全焼したが、あまり
話さず、父は自らの学徒出陣を一度も語る
ことなく……体験者の言葉を記録するのは
重要。もう時間が無い——70代の方の言だ
が、この集いにいらしてから初めて言葉
にされたか、と感じられた。「伝わる」こ
との一つの形ではないか。為すすべもない
「不特定単数」を思う。

(さとう・いつこ／山の手空襲を語りつぐ集い実行
委員会)



音楽の感動に一言

——「山の手空襲」79周年追悼 朗読とピアノの集い

山本 唯人

7月13日、青南小学校体育館で、「山の手空襲」79周年追悼朗読とピアノの集いを開催しました。主催は山の手空襲を語りつぐ集い実行委員会。その実行委員会では、2016年から毎年1回、穂田区民会館で青山・原宿界隈の空襲体験を語りつぐ集いを開催してきました。新型コロナウイルス流行のため、2019年の第4回を最後に集いは中断していましたが、今年はその集いを再開するとともに、ウィーンで活躍するピアニスト・佐藤麻理さんを招き、継承への呼びかけの意味を込めて、「朗読とピアノの集い」を開催することになりました。

発案は実行委員の一人・佐藤いつ子さんでしたが、わたし個人の背景としては、2012年2月13日、ドレスデン・三王教会で体験した、追悼式でのチェロとピアノの二重奏の印象がありました。抑えた曲調が、教会のしんとした空気と響き合い、胸に迫る感動がありました。

佐藤さんによる選曲は、ベートーヴェン「悲愴」、ショパン「雨だれ」「夜想曲（ノクター

ン）、ブラームス「7つの幻想曲集」、バッハ「主よ、人の望みの喜びを」。その演奏は、ドレスデンで聞いたものより情熱的で、抑揚にも富んでいましたが、山の手空襲という大きな出来事のなかにある、無数の言葉にならない経験や思いの連なりを連想させ、会場は感動で包まれました。ドレスデン以来、このように、人の心を震わせメッセージを伝える音楽の力を、久しぶりに体験できました。佐藤さんに演奏をお願いして、よかったと思いました。

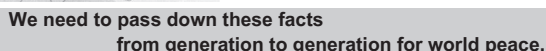
同時に、この感動の中身をより分けてみると、会場の小学校は被災地のただなかにあり、戦火の記憶と分かちがたく結びついていること。この日、会場で発言した体験世代の泉宏さん、山形美智子さん、中村道子さんの言葉が、それぞれに短くとも、渾身の思いを伝えるもので、それらすべてが響き合い、集いの印象が作り出されていたことは重要でしょう。

感動なしに、真に物事が受け継がれるのは難しいことです。しかし、感動そのものは、実は技術によって膨らませたり、変調

させたり、外に運び出して再演したりすることのできる、加工品の側面を持っています。今回のつどいでは、まさにその出来事を身に受けて、戦後を歩んでこられた方がその場にいて、その知識と思いを授けていただけでしたが、それができなくなったり、果たしてこの感動を、内実をとまなつて伝えることができるか——そうした疑問と不安がよぎり、今も去らずにいます。

この日、体験者が語ったことは、民話や創作としての物語の類ではなく、まぎれもなく、かつての戦争で、ひとりひとりの身に起きた事実としての出来事です。みごとにスパイクを放つバレーボール選手の傍らに、一歩身を引き、的確にトスを上げる選手が必要のように、歴史と表現の共創的な空間には、土台となる記録の収集と事実の検証に徹する存在が不可欠です。比留間柏子さんたちの作った体験記集『表参道が燃えた日』正統の2冊は、記録の土台となる書物ですが、今後の読者を思い浮かべると、さらに補う必要を感じています。山の手空襲を語りつぐ集いは、その立ち上がりにあたって、「山の手空襲の体験を次の世代に伝えていくこと」「歴史から学び、戦争を二度と起こさないようにすること」を二つの趣旨として掲げました。「伝えていく」ことの目的が、ひとの「体験」の伝承にあ

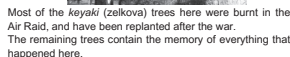
79 years ago tonight, May 25th
Here. Omotesandō was burnt down in the air raid by the Allies.



When I got to the Aoyama 5-chome area, I saw an unbelievable and horrible sight. Their hair and cloths were also burnt, so that I wasn't able to distinguish the bodies between men and women. There were dead bodies strewn all over the place. In front of the Aoyama police station, I found dead people, hugging each other in a circle. They must have been a family. At that moment, tears were flowing from my eyes.

Then, I saw a terrible and sad scene in Omotesando that looked like hell. There were about 100 bodies piled up, some charred and resembling mummies and other like mannequins. I saw several burnt corpses still clinging to a street lantern, and others sitting upright and praying towards the direction of Meiji Shrine. How painful were they?

Two friends of mine, whom I was playing with until the day before, also passed away.



History of modern Japanese wars	
1894-1895	Sino-Japanese War
1904-1905	The Russo-Japanese War
1914-1918	World War I
1937	Japan invaded China
1939	World War II
12/8/1941	Japan attacked Pearl Harbor → The Pacific War
3/10/1945	Great Tokyo Air Raid
5/25/1945	Yamanote Air Raid
6/23/1945	The end of the land battles on Okinawa Island
8/6&9/1945	Atomic Bombings of Hiroshima and Nagasaki
8/15/1945	The acceptance of the Potsdam Declaration and the Unconditional Surrender of Japan

May 25th, 2024
「山の手空襲を語りつぐ集い」実行委員会

い」という意向に、翻訳の知識も経験も無いながら、和英辞書頼りに当てはめた英訳は、外国人に分かりにくいだろうと少々困惑し、再度手記を読み返しました。その言葉の一つ一つには、恐ろしいほどの凄みがあり、赤裸に記された光景が迫ってきて、これらの表現を大切にして伝えたいと、私も感じたのです。この部分の英訳には、殊に苦勞しましたが、友人、家族の手を借り、何とか形を成しました。献花の集い当日、若い外国人女性が、英文チラシとスマートフォンを交互に読んでいる様でした。関心を持つてくれたと思えた瞬間でした。

賑わいの街路とその姿に、冒頭過つた思いが重なります。国際社会の軋みは増し、戦闘の惨状が繰り返されている今、過去の事実を知り、そして伝え、国を超えて考え続けることが大切なのだと、強く感じています。

世界の何処にあつても、前の大戦を知る方々のお話を、その息遣いを感じながら聴き取る機会は限られています。

古賀 麻里

英文チラシについて

ることを深く認じ、若者たちが登場し、若者や表現者との協力が求められる今だからこそ、もう一度、記録に向き合い、足元を固めなおす課題があることを刻む、今年の集いになりました。

（やまもと・ただひと／山の手空襲を語りつぐ集い
実行委員会）

表参道には多くの外国人が行き交っています。世界の現状を思えば、中には、故国が戦禍に在る人もいるかも知れません。5月25日、山の手空襲当日に行なわれる「献花の集い」を手伝って3年目、外国の人にもチラシを配って、献花を呼び掛けたいのだが……と、活動を共にする中学3年時の担任から課題が出され、英文チラシ作成が

イスラエル不招待をめぐる議論

——被爆79周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

山口 響

8月9日の原爆忌に長崎市が毎年開催している「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」には、日本の首相や主要政党の代表など国内からだけではなく、海外の多くの国・地域の代表も招待される。

今年は100カ国・地域と欧州連合(EU)の代表が参列したが、その中にイスラエルの姿はなかった。長崎市が招待しなかったためである。では、長崎市はなぜイスラエルを招待しなかったのだろうか。この決定をめぐる長崎ではどのような議論がなされたのだろうか。

はつきりしない理由

長崎市の鈴木史朗市長は6月3日の記者会見で、「イスラエルにつきましては、日々刻々と情勢が変化しており、その推移を見極める必要があることから」、招請状の発送を保留すると発表し、その上で、次のような内容を含んだ書簡をイスラエルに送付すると説明した。「二つ目といたしまして、即時停戦を求めること。二つ目として、現下の情勢に鑑み、主催者として、安全かつ

円滑な式典運営のため、不測の事態が発生するリスク等を総合的に判断した結果、現時点での招請を見合わせる。第三に、招請に特段支障がないと判断された時点で速やかに招請状を发出すること」。

市長はさらに質疑応答の中で、「現下の情勢」とは「現下のガザ地区におきます危機的な人道状況、あるいは、それに対する国際世論の状況」のことだと答え、さらに突っ込んで、「国際世論の状況」とは、国連安保理でガザ地区に対する人道支援の拡大と監視に関する決議が採択されていること、国際司法裁判所が暫定措置命令を出したこと、上川陽子外務大臣が即時停戦を求める発言をしていることなどを挙げた。

つまり市長としては、昨秋以降のイスラエルがガザ地区に対する行為についてはかなり批判的に見ているようである。

ただ、よくわからないのは、イスラエルをめぐるそうした状況があるからといって、それが「不測の事態が発生するリスク」をもたらす、というくだりである。イスラエルを招待したことに対する過激なデモン

どが8月9日当日に発生して、平穏な式典の運営が妨げられかねない、ということをお願いしたいのだろうか。

だとすればそれは、平和記念式典を平穏に実施することを名目として8月6日に平和記念公園近辺への立ち入りを規制した広島市の松井一實市長とあまり変わらない姿勢だということにならないか。平たく言えば、「いろいろな面倒なことが起きそうだからイスラエルは呼ばないでおこう」と考えているようにも読める。

「政治判断ではない」

もうひとつよく理解できないのが、鈴木市長が自らの決断について「政治的な判断に基づくものではない」と繰り返し述べていることだ。

なぜそこまで「政治」なるものを忌避しなくてはならないのか理解に苦しむ。イスラエルのガザ地区での行為が原因となつて今回の不招待の判断があるとすれば、それはどうみても政治的な判断ではないか。

イスラエルがそもそもどういう国であるのか、パレスチナの人々をどう扱ってきたのか、ガザ地区に対するイスラエルの最近の行為をどう考えるのか——こういった根本的な問題についてまともに説明すること拒絶したまま、「招待しない」という判

断のみが表面上は先行することになってしまった。

結果として、日本を除くG7諸国が、長崎市の判断への批判的対応として、例年とは異なつて大使級の参加を控えるという事態に至つた（「参加せず」という報道もあつたようだが、正確には、公使など格下の人物は参列させている）。

長崎市の判断が国内外でこれほどの反響を呼ぶとは市長はあまり予想していなかったかもしれない。市長は、式典後の8月27日の記者会見でこう述べている。

「どのような判断を行なつたにせよ、政治的な影響というのは起こるものなんだなというふうに改めて思いました。私が全く違う逆の判断をしたとしても、恐らく政治的な影響が出たかと思えます。そういう意味では、政治的な影響の根源は何かというと、やはり現地で紛争が起こつていて、政治的な対立も起こっているということかというふうに思います。したがって、被爆地長崎市として、そのような紛争が一日も早くなくなることで、一日も早く停戦が実現し、そして平和が実現して、このような政治的な影響もなく式典の参加者を招待できるような環境が整うことを切に願つております」。

この発言にも表れているように、問題なのは、ガザの情勢に対して長崎市が受け身の姿勢で臨んでいることだろう。「平和は長崎から」という占領期からのスローガンが長崎にはあるが、もしそう言いたいのならば、「世界の情勢が落ち着いたら招待しよう」などという生ぬるい態度ではなく、被爆地として紛争に直接介入していくぐらの気持ちが必要ではないのか。

日本を除くG7諸国とEUの駐日大使は7月19日、イスラエルを式典に招待するよう求める連名の書簡を長崎市に送つた（長崎新聞、8月8日）。また、上川外相によれば、外務省もこの件で長崎市に対して国際情勢を含めた「説明」を行なつてきたというが（8月8日記者会見）、イスラエルの招待を求める実質的な「圧力」だった可能性もある。これらの圧力にめげず不招待を貫いた長崎市の矜持は買いたい、ならば、セキユリティ上の理由などという理由にもならないような理由を持ち出すのではなく、不招待の「政治的」理由を市長が正面から語るべきであつただろう。「式典が政治利用された」「ロシアとイスラエルを同列に扱うな」と米国などから批判されたのなら、「政治利用して何が悪い」「同列の行為がある

から同列に扱つたまで」と堂々と反論すればよかったのではないか。

市民の反応

他方、この問題は、22年のロシアによるウクライナ侵攻以降に、長崎市と広島市がロシア・ベラルーシ両国の式典への招待を取りやめた、という状況とセットで考える必要がある。

今年、広島市は、ロシア・ベラルーシは呼ばないがイスラエルは呼ぶという判断をすることによって、イスラエルの行為に免罪符を与えた。他方で長崎市の方は、ロシア・ベラルーシとイスラエルを同列に扱うことによって、米国をはじめとしたイスラエル支持勢力からは反発を招くことになつた。

ただし、それでもつて、長崎市の判断を（二つの戦争に批判的な立場から）好意的に評価できるかというと、それほど話は単純でないように私は思っている。

というのも、ロシア・ベラルーシを招待しないという最初の判断に対して、私は少々疑問を持つていたからだ。長崎・広島両市はこれまで「被爆地に来て被爆の実相を実地で学んでもらいたい」と各国の指導者や市民らに訴えてきたはずだ。だとするならば、プーチン大統領が核使用の恫喝を

背景にウクライナを侵攻している今こそ、ロシア代表を招待し、大使に直接の会談を申し入れるなどして圧力をかける必要があった。

ところがここでも「不測の事態」というあいまいな理由によって、両都市はロシアとの関わりを持つことを避けてきた。結局、核兵器廃絶という美辞麗句を口にしたながらも、面倒な政治の世界から一身を引いて安全地帯からスローガンだけを叫んでいるように私の眼には映る。

もちろん、招待しないことによって、ロシアやイスラエルに対する抗議の意思を示す効果を長崎市が持たせようとしていることも、いちおう理解はできる。

このように、招待するにしても招待しないにしても、その理由や意味の持たせ方などには複雑なものがあり、今回の長崎市の判断についても長崎市民や被爆者の意見は相当程度、割れることになった。

たとえば、長崎原爆被災者協議会（長崎被災協）の田中重光会長は「イスラエルは武力を行使して虐殺同然の行為をしている。来てもらわなくていい」と発言している（長崎新聞、8月8日）。他方で長崎原爆遺族会の本田魂会長は「参列が対話につながると考えれば全ての国を招待すればよかったのではないか」と語っている（長崎新聞、

8月9日）。

また、長崎県被爆者手帳友の会の三田村静子副会長は「大切な式典がこんなことになり複雑」と困惑したというが、8月6日や9日が「平穏な一日」であってほしいという願いは多くの被爆者の中に強くあり、それに「政治的表現の自由」を対置して反論できるほど事態は単純ではない。広島からの発言だが、「被爆者にとつての法事、慰霊式を政治的に使われては困る。来年はどうなるのか」という広島県被団協の箕牧智之理事長の感想がそのことを物語っている（いずれの発言も、長崎新聞、8月9日）。「来てもらわなくてもいい」と憤った長崎被災協の田中会長にしても、「鎮魂の祈りをささげる式典が政治的な話ばかりで注目されるのは残念」と語っているのである（長崎新聞、8月9日）。

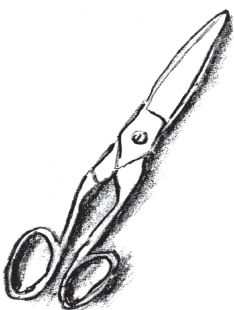
「招待する、招待しない」より大事なこと

「招待する、招待しない」に世間の耳目が集まりがちだが、そのこと自体はそれほど大きな問題ではないのかもしれない。長崎県被爆者手帳友の会の朝長万左男会長は「ガザ攻撃は明らかに非人道的なので呼ぶべきでないとの意見がある。それでもあえて招き、平和の式典を目の前で見てもらう手もある」と述べ、平岡敬・元広島市長は

「選別するのではなく全ての国を呼ぶ。来るか来ないかは招かれた側の判断だ。反戦反核の趣旨にそぐわない人は来なくていい」。そんな基準をいずれ考えてもいい」と語ったという（長崎新聞、8月11日、共同通信・太田昌克記者取材）。

結局のところ重要なのは、招待するならするで呼んだ相手に何を訴えかけるのか、招待しないならしないでその「政治的」理由をどうはつきりと説明するのか、ということにあるのではないか。長崎市長がこれまでのところそうした説明を拒んでいることが残念でならない。

（やまぐち・ひびき／長崎の証言の会）



象徴天皇制という〈超特権的奴隷制度〉からの脱出

天野 恵一



イラスト：ほしのめぐみ

天野 アノネ、この間テレビで、「ローマの休日」やってたので、子供の頃見たそれをキチンと観なおせた。1953年にアメリカ（ハリウッド）でつくられて、1954

年に日本で上映、あのオードリー・ヘップバーンが主役の、たった一日だけの「王女さま」の甘く切ない恋物語。観てるでしょう？

——もちろん。グレゴリー・ペックがイタリアにいるアメリカ人記者役のあれでしょう。

天野 ええ、最もポピュラーな王女様のロマンス映画。演出はウィリアム・ワイラー。せっかくだから、これを素材に少し話すことから始めたい。

——ストップ。その前に、愛子「女帝」の可能性をめぐる週刊誌報道。首相の交替がハッキリしてきている中で、これがどうなりつつあるのかを、前回の流れに即して、まず検証してください。

天野さん、映画の話になると、どこまで脱線してしまうかわからないから（笑）、まず、そちらの方から。

天野 ハイ、ハイ、わかりました（笑）。まず、『女性セブン』（9/1号）「愛子さまを

天皇に 進次郎が挑む20年因縁」からいきましようね。

父純一郎が首相の時、女性（系）天皇を可能にするコースを進めていたが、秋篠宮家の男子誕生でストップされた、それを、息子の進次郎が首相になれば実現するのはないか、との記事ですね。

「純一郎氏が皇室制度改革に着手したのは、04年末のことだった。当時、皇室は男性皇族が40年誕生しない状況にあり、お世継ぎ問題に直面していた。純一郎氏は、64年12月に皇室典範に関する有識者会議を設置。05年11月に最終報告書が取りまとめられた。／『最終報告書の中では、女性天皇、及びその子供となる女系天皇を認めること、また、皇位継承順位については男女を区別せずに直系の第一子を優先させることが盛り込まれました。つまり、国会で法案が成立すれば、皇室典範が変更され、『愛子天皇』が将来的に実現する運びだったのです。当時も反対意見はありましたが、純一郎氏は

粛々と議論を進め、皇室制度改革を果たそうとしていました」（前出・宮内庁関係者）／有識者会議の設置から最終報告の取りまとめまで約1年間というスムーズな進行の背景には、純一郎氏と当時皇太子ご一家だった天皇ご一家、とりわけ雅子さまとの奇縁ともいえるつながりがあったとされる」。

——小泉家と、小和田家の外交官の父を持つ雅子さんの二家との、数十年來の長い関係ってのがあったのね。

天野 そうらしいね。だから、父のコースも子が走るだろうという期待をもこめた記事ですね。

——それなりのリアリティがあるんじゃないの。

天野 ウーン。それなりの根拠はあるけど、もう一つ紹介しておくね。『東京新聞』の週1回（日曜日）の「週刊誌を読む」（8月25日）のコラムにも紹介されている記事。

『「女性セブン」9月5日号は、総裁候補の中に『女系天皇』容認派が多いとして、『愛子さま「女性天皇」実現へ！』と謳っている。一方『女性自身』9月3日号は、進次郎氏の背後に菅前首相など保守派が控えているため、進次郎新首相なら『愛子天皇』消滅と、逆の予測をしている」。

——エッ、なんで。

天野 「女性セブン」の方は、そういう内容です。「女性天皇制」に消極的だった菅前首相は、小泉とは横須賀での地域でつながりが深く、菅がバックアップしているのは事実です。

でも、首相交代状況は、間違いなく〈愛子天皇〉のチャンスというキャンペーンと、政治的可能性を拡大していくことだけは、間違いないと思いますよ。

——ハイ、映画「ローマの休日」の方についていいですよ(笑)。

天野 いや、たいして関係ないのに論じた、なんてわけじゃないのよ(笑)。

この間、何度もここで論じてきた奥平さ

んの学説の説明のわかりやすい素材として使おうと、思いたったのですよ。
——それなりに、わかってますよ。ハイ、始めてください。

天野 奥平さんの『萬世一系』の研究——皇室典範なるものへの視座』に示された主張を、私が天皇制とは「超特権的奴隸制」という奇妙に矛盾した制度であると規定していると理解する、という話は、ここでも語ったことはあると思います。

「ローマの休日」の王女は、たった一日だけ、自分が持ったことのない、ごくフツウの人が持っている様々な自由(人権)を行使する。移動・居住・恋愛・それこそ人のために料理する自由などの……。その後、国家と王室の責務のために決意して、それらすべてを失う世界に決意して帰っていくのですね。ガキのころ観た時は、この王女の悲劇にひたすら「生まれ」という「宿命」を生きたるを得ない、主体的にそれを選

択する彼女の悲劇に、多くの人々と同様に深い同情を抱いて劇場を出てきたと思う。

でも、今度は、「国家と王室」の責務なんて放り出して、サッサと逃げ出してしまえばよかったんじゃないかと、考えた。男(グレゴリー・ペック)の方にも、女王への思いやりはあっても、解放してやろうという強烈な情熱がないのは、つまらないナー、などと考えたのです。

——なにを話したのか、少しわかったわ。あの映画、ある小国の、次に王になることが決まっている王女という設定だったでしょう。

天野 らしいけど、ヨーロッパ訪問(イタリア)に来て、記者会見が新聞各紙一面トップに載る(記者はそれで彼女が王女だと知る)つていう話でしょう。現実にはイギリス王室クラスでないとおかしい物語の設定になっていますよ。

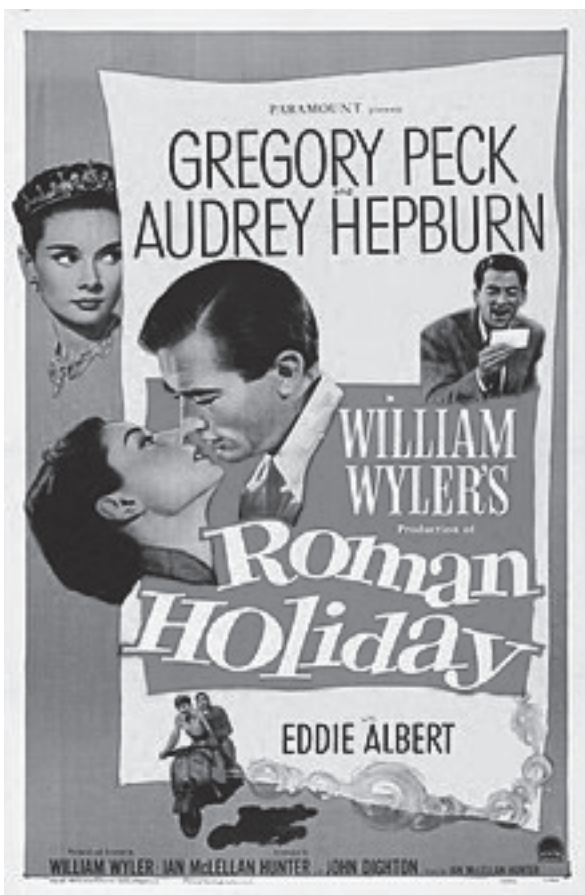
——でも、現実の国家の話ではない設定でしょう、やはり。

天野 でも、イギリス王室の誰がモデルだ、などといううわさ話には、事欠かないらしいよ。

——でも、イギリスという設定ではナイ。

天野 まあ、そうですね。

奥平さんの学説の輪郭を、まずまとめて整理してみるね。繰り返しになる部分も多いかもしれないけど、お許しください。



アッ、その前に、奥平さんのこの理論も、自分たちの学説の不十分というか決定的に「失敗」した認識への強い反省をバネにうみだされたものです。彼が「ほんの少しの天皇制」・「ちょっとだけ天皇制」論と名付けた、戦後の憲法解釈学の大主流の、もちろん自分もそうであった解釈への反省から、自分の理論を作り直します。この学説のボスは、美濃部達吉の弟子だった宮沢俊義さんですね。

私の言葉に置きなると、天皇主権から国民主権に原理が転換した戦後憲法に「象徴＝人間」として残された天皇制は、その政治性・宗教性は極端に弱体化した。だからその政治性・宗教性が強化されることに、ブレーキをかける解釈のコントロールで危険性はなくなる。「ほんの少し」の「ちょっとだけ」天皇制という奥平さんの認識の前提はこういうものです。

——それを、いつ、どう反省したの。

天野 昭和天皇ヒロヒトの「Xデー」の状況下での人々の大騒ぎの状況と、その渦中の政府の動きを眼前にして、ハッと気がついた、これではダメだと。そんなふうで発言してますね。具体的に引きますね。1989年、1月号の『世界』に書かれた「日本国憲法と『内なる天皇制』」は、このように書き出されています。「西ベルリン」

にいて、外から日本の状況を視て、書いたものですね。

「1989年9月30日以降、日本を襲った天皇『ご容体』報道の洪水およびそれに呼応して広範に国民の間に展開した『自粛』騒ぎ、総じて『天皇フィーバー』と称しうる状況は、その激しさにおいて、まず私を驚かせた。私は、天皇『ご容体』情報がそんなに強い需要価値を持つとは、じつは思ってもみなかったし、その情報がバネになって、こんなに全国津々浦々の人びとが同一歩調をとることになるとも、考えていなかったからである。／この点において私は『見込み』違いをしていたのであるが、なぜ、こうした『見込み』違いを私はおかしただのであろうか。このことの説明が私自身に要請されている。／同じ現象に関して私の注意を惹いたのは、マスコミの大騒ぎといい、民間の『自粛』動向といい、ともに、一方では『なんとなく』ムードに支配されたものと捉えることができるものではあるとしても、所詮は『自由意思』の所産ともいふべき実質を具えていたという点である。強い言葉で言えば、国民大衆は『自主的』に、好んで大騒ぎしたといえる気配がうかがえるのである。これが私には深刻に響いた」。

この「自主性」を支える感情と理論を、彼は「内なる天皇制」と名付けたわけです。——天野さん、どこかで言っていたと思うけど、「内なる天皇制」という言い方に批判的だったんじゃないの。

天野 ウン、別に奥平さんの主張じゃなくて、そういう言い方で、具体的に検証させないで天皇制の力を神秘化してしまう言い方が一部に、はやっていたからね。奥平さんの論理は、そうしたものは逆ベクトルの主張ですね。

政治（法律）的には、よく見えない（文化）的な力といったものです。それを論理的に正面から対象化するための概念ですね。こちらの方から考えれば、天皇制は「ちょっとだけ」どころではなかった。

——岩波新書『昭和の終焉』（1990年）に収められている、この論文で宣言された作業の大きな成果が『萬世系』の研究』としてまとめられたという



わけですね。

天野 ハイ、大急ぎで、結論的なところだけいきますね。国費で特権的生活をまるがかえ、国がその権威を保障する天皇〈皇族〉という特権身分は、普通の人間が持つ、自由（人権）をまるごと奪われることで手にすることができ「世襲」制に支えられた身分である。それが戦後憲法によってつくられた象徴天皇制の身分秩序です。

ただ、奥平さんは、私が〈超特権的奴隷制〉と名付けたこの制度から、特権を自発的に放棄して「脱出」する権利をも憲法が保障しているという点に、大きく着目するわけです。

〈第十八条『奴隷的拘束及び苦役からの自由』〉の「何人も、いかなる奴隷的拘束も受けない、又、犯罪に因る処罰の場合を除いては、その意に反する苦役に服せられない」。

この条文ですね。

普遍的な人権をかける憲法の中に入りこんでしまっている〈世襲の特権身分〉制度の原理ですから、この敵対矛盾した原理を排除していく力が、戦後憲法には内在している。それが〈十八條〉である。天皇ら皇室の個々人が自発的に特権を放棄さえすれば人間的自由は手にできるはずだという戦後憲法理解ですね。

——憲法十四條は、こつう規定ですからね。

「すべて国民は法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分、又は門地によつて、差別されない。」

華族その他の貴族の制度はこれを認めない。

栄誉、勲章その他栄典の授与は、いかなる特権も伴わない。

栄典の授与は、現にこれを有し、又は将来これを受ける者一代に限り、その効力を有する」。

天野 そもそも「主権在民」原則の憲法で、あの第一条ですら、天皇の「地位」は「国民の意思」で変えられる、なくすことだって可能だと書かれているわけですから。

奥平さんの解釈は、十分、論理的に可能だと言えらると思いますよ。

——へー、ずいぶん戦後憲法に、天野さんらしくらぬ、肯定的評価ですね。

天野 イヤ、奥平さんの学説に則せばという条件付きだけどね。

——よくわかりました。「ローマの休日」のオードリー・ヘッバーン演ずるステキな王女様には、国家と王家の責任という「奴隷」の世界に帰るのではなくて、人間的自由（人権）の世界へ向けて、「脱出」してもらいたかったわけね。

その点はよく理解できます。

天野 昭和Xデー状況で露呈したことから踏まえた、奥平さんの反省のプロセスを、もつとキチンと理論的にたどる作業を

持続したいと思うけど、イージーな「皇室典範」違憲論を彼がとらないのは「内なる天皇制」の力をあなどることで成立する憲法學說から離脱しようという彼なりの努力の結果であることを、まず確認しておきたかった。象徴天皇制という支配のシステムは、戦前（中）から生き残った「内なる天皇制」という文化とセットで存在している。この重大な問題を無視し、非政治・非宗教（人間）というタテマエで成立している象徴天皇制を、まるごと共産党的に肯定していつてしまえば、世襲の身分制度の国家原理であることを無視して、民主戦後憲法に「典範」の女性差別規定を正しく合わせる、「女性（女系）天皇制」の実現へという「違憲論」で、象徴天皇制の「民主化」を、という主張になってしまうのは、わかりやすい話ではないですか。

——共産党的「違憲論」の問題や護憲派の女性天皇なら天皇制OKという主張の問題は、奥平さんの學說の内実の紹介とともに、次回以降、もう少し、ゆつくりやりましょう。だいたいお疲れのようですから、今回は、このへんで。

天野 ハイ、クタクタです。

〈よその〉目線の広島⑮

「ジェノサイド一年」 目前で思う 広島サミットの功罪

田浪 亜央江

7年半前に広島に来た時、まさかこんなに平和公園の周りをぐるぐる回る生活をするようになるとは思ってもみなかった。最初に住んだのは、市街地からやや外れた横川駅の近く。平和公園の周りに住むなんて、広島の「復興イデオロギー」に加担するようなもので趣味悪いと思っていた。諸事情で引越すための家探しを始めたときもこのエリアは眼中になかったが、条件に合う部屋がたまたま平和公園のすぐ近くにあった。結果的に、平和公園の脇の道を車で通って職場に向かうようになったのに加え、1年前からは夕方の原爆ドーム前でのスタンディングに参加するために公園内を自転車ですくつ切る。さらに最近、平和公園脇のエ

リアに事務所をもつことになってしまったのは前号でも書いた通りだ。

暑さ真つ盛りの7月下旬に事務所の床貼り作業をしてからちょうど2カ月がたったが、それ以来この事務所に手をつける気にはなれなかった。広島平和記念式典へのイスラエル代表招待への対抗アクションその他で8月初旬は怒涛のように過ぎ、その後は東京に行ったり、ふだんは出来ない仕事や片付け物をしたり。そんなこんなでも9月もあと1週間だ。つまり10月7日、ガザで悪夢のようなジェノサイドが始まって、もうすぐ1年になってしまう。対抗イベントを計画しているから、リフォームを進めて事務所の使い心地をもう少しマシなものにしておきたい。

いま私は左官職人のように右手にコテ、左手にコテ板を構えて漆喰と格闘している。汚い壁のリフォームが済めば棚を壁に付けて固定できるから、何とか事務所として使えるようになるはずだ。以前、試しにペンキを塗ってみたが、壁紙の汚れはカバーされず、余計に汚らしく見えた。だが漆喰という素材の存在を思い出し、サンプルを買って試してみると、汚れがうまくカバーできるだけでなく、何となくパレスチナの家のような雰囲気さえ出るではないか。ようやくやる気がムクムクと湧き、材

料を調達して日程を決め、まわりのメンバーに漆喰塗り作業への参加を呼び掛けた次第だ。

最初にレベッカが登場し、次いでYさんやAさん、しばらくしてインドネシアからの留学生Sさん。コテの使い方と注意点を説明し、持ち場を決めた後はお任せにする。どのみち素人仕事なんだから、細かいことは気にすまい。と思いつつ、手つきがどうも違うなーと思ったAさんに対しては、「ちょっと貸して」と言ってコテを取り上げてやって見せる。だが、すぐに後悔して「まあ、人それぞれのやり方があるよね」などと言いながらその場を離れた。

私自身が一番汚れの目立つ窓枠の周りから始めたのだが、広い壁面と違ってここは難しい。コテは使えないから小さなヘラを使ってみるが、表面がガタガタになる。嫌気がさして少し離れた壁面を塗り始めるが、結局中途半端に塗り進めている箇所が2つに増えるだけだ。偉そうに人に塗り方指南なんかするものではないと焦っているところへ、アメリカ人のマラカイが登場した。

英語の話し相手の登場とあって、とくにレベッカのテンションは上がる。途端におしゃべりに火がつき、最近のパレスチナ・レバノン情勢や、前夜のイベントの話、い

ま流れている音楽はどうこう、といった話が絶え間なく続く。漆喰と格闘中の私はほとんど聞いていないが、マラカイは黙々と作業をする日本人メンバーにも、嬉しげに話を振る。驚異的なコミュニケーション能力をもつ若者で、相手によって語彙のレベルやスピードを自然に変え、英語の分からない相手ともなぜか会話ができる。

長身の彼は、高い梁の部分に手を伸ばしていい加減に漆喰を塗りながら、私のほうに向きを変えた。「ひとつ聞きたいんですが、イスラエル産レモンのボイコットについてどう思いますか?」。レモンは広島の特産物でもあるから、イスラエル製品のボイコット運動の中でも象徴的なターゲットに出来る、という話が出ている。「うーん、前にも言ったけど、農産物の流通は複雑だから、ボイコット対象としては難しいよね」。「オーライ。でも『複雑』という評価はとかく、それについて『やらない』場合に使うのですよね」。「やらないとは言っていない。でも例えばイスラエルで作られていない場合でも、ジャッファ・レモンはブランド名として流通している。私たちは、イスラエル国内で作られたレモンだけをボイコットするのか、それともジャッファ・レモンというブランドをボイコットするのか、ジャッファ・レモン・ガムみたいに、

それを使った製品全部をボイコット対象にするのか、そういうことも考えないと」。少し経つと、また別の質問が出る。「例の資料館の音声ガイドの件では、どのような取り組みが必要だと思いますか?」

これはつい最近、SNSで広がっていた話題だ。広島平和記念資料館で、来場者に貸し出している音声ガイドの機器に「Made in Israel (イスラエル製)」とのラベルが付いているとのこと、その写真が拡散している。灯台下暗しで、今まで気がつかなかったのは間抜けな話だ。ただし、この写真だけでは製造企業名が分からないので、半信半疑の曖昧な話にとどまっている。

そう、「少しおしゃべりが過ぎる」なんて内心想っていたが、マラカイは重要なことを思い出させてくれたのだ。翌日、やや強引に早目に職場を出て、平和資料館に向かった。日常的にこの辺りをぐるぐる回っているというのに、中に入るのは久しぶりだ。目的はもちろん音声ガイド。展示はまた別のときにゆっくり見るとして、機器の裏面の「Made in Israel」、そして表面にある「Acoustiguide」という表示を確認して何枚も写真を撮る。この企業は日本人を保持していて、美術館や博物館での音声ガイド導入実績では最大手、ということの後で確かめた。詳細をここに書く余裕はないが、

いろいろと収穫があった。……ああ、やること、調べなきゃいけないことがたくさんあるのに、漆喰を塗って一日が終わってしまふ昨日のような日もある。でもそれが、まったく別のことにもつながりもする。

平和資料館を出てふと顔を向けた方向に、「G7広島サミット記念館」があるのに気が付いた。そんな代物が出来たとは聞いていたが、この、大きめの物置のような外観のこれが、それか。岸田が首相の座から去ったらすぐ撤去される代物では、とも思ったが、あとで調べたら伊勢志摩にも洞爺湖にも「サミット記念館」は存在し、いまだに運営されているという!

今年の8月は、去年のG7広島サミットが生み出した功罪を改めて認識する機会でもあった。何しろ長崎の平和祈念式典へのイスラエル不招待に対し、連名で抗議の書簡を送って大使が式典を欠席したのは、きっちり日本以外のG7諸国(とEU)なのだから。核抑止を謳った「広島ビジョン」を採択したことで、これらの国がジェノサイドを続けるイスラエル擁護のために団結し、長崎の式典を欠席したこととのつながり。忘れてはならない。隔月に一度、ここには日常の光景を言語化しておくことも、私にはやっぱり大切なことなのだ。

(たなみ・あおえ／中東地域研究)

〈原発再稼働・汚染水海洋投棄を許すな〉 原子力規制委員会毎水曜昼休み抗議行動

阿部 めぐみ

長い名前ですが、この名の通り、私たちは毎週水曜日の12時から13時に、六本木一丁目の、原子力規制庁の入っているビルの前で、規制庁（と、この国の原子力政策）にスタンディングによる抗議行動を行なっています。2013年からですから、もう10年か、と気付いてお互い驚くこともある日々です。参加メンバーは時により数人から数十人、水曜日に開催される原子力規制委員会の定例会議に重要な議題が入る日には、

再稼働阻止全国ネットワーク、原子力規制を監視する市民の会、等、他団体からも多くの仲間が集まります。ささやかな運動ですが、時に外国からの取材も入ります。

8月末、この行動の言い出しつべであり、毎回参加の木村雅英さんから、中国日報社東京支局記者名で次のメールが届いたよと、皆に報告がありました。

「質問にお答えいただき、ありがとうございます。2024年8月23日に福島第一原子力発電所からの汚染水の排出が開始されてから1年後、日本の市民が排出停止を求めているという内容の物語が、China Daily（中国日報）に掲載されました。……このメールには、物語が掲載されたページのデジタル版も添付しています。私の仕事へのご支援に感謝いたします。幸せて健康な生活をお祈りします。よろしく願いたします」

「質問にお答えいただき、ありがとうございます。2024年8月23日に福島第一原子力発電所からの汚染水の排出が開始されてから1年後、日本の市民が排出停止を求めているという内容の物語が、China Daily（中国日報）に掲載されました。……このメールには、物語が掲載されたページのデジタル版も添付しています。私の仕事へのご支援に感謝いたします。幸せて健康な生活をお祈りします。よろしく願いたします」

記事は3つあり、それぞれに、『日本国民が核水の放出禁止を求める』『日本の各汚染水放出の記念日に反対の声が強まる』『福島の核汚染水排出から1年後、日本の

市民は排出の停止を求め続ける』とのタイトルがつけられていました。

多くの市民の、なかでも生活をかけた全漁連の重い反対を押し切り、合意が得られるまで強行しないという約束をも反故にしてなされた「ALPS処理汚染水」の海洋放出。それに対して日本からの海産物輸入禁止措置をとった中国で、市民の目が日本の市民に向けられていたことが本当に嬉しく思われました。

〈再び政府の過ちにより戦争の惨禍を繰り返さぬよう、国同士の軍事による安全保障条約でなく、市民同士の安全保障条約を〉という言葉、そうだ、言い続けていこうと思いました。

毎週水曜日、原子力規制庁前では、思い思いにプラカードやのぼりを持ち、3分間（？）スピーチも交代で行ないます。

「原子力規制委員会は原子力推進委員会になるな!」と、規制委の入居するビルに向かつて訴える人、「原発の問題を一緒に考えましょう」と、昼休みで休憩中の人や通行人に呼びかける人、様々ですが、発信の継続が力になればと続けています。六本木一丁目の立派なビル前の広場、飛び入り大歓迎です、どうぞご参加ください。

(あべ・めぐみ／本誌編集委員)

WORLD

Japanese citizens call for halt to discharge of nuclear water

Concerns aired over food safety as 1 year of release marked

By JIANG XUBING in Tokyo
jiangxubing@china-daily.com.cn

A year after Japan began releasing nuclear-contaminated water from the Fukushima Daiichi nuclear power plant into the Pacific Ocean, many Japanese citizens are still upping calling for an immediate halt to the discharge, which has failed to reassure both neighboring countries and the Japanese public.

"Our opposition to the ocean discharge of Fukushima's nuclear-contaminated water remains unchanged. We want it to stop immediately," said Rieko Matsui, a representative of the Complainers for Criminal Prosecution of the Fukushima Nuclear Disaster.

None of the concerns regarding safety, stakeholder agreement, or justification have been addressed, and the citizens of the Pacific Island countries are even more outraged, Matsui added. "I am very sorry that Japan is contaminating the world's oceans instead of trying to contain nuclear waste pollution in its own country."

On Saturday, Japanese citizens



People gather in Tokyo on Saturday, calling for an end to the release of nuclear-contaminated water from the crippled Fukushima Daiichi nuclear power plant into the ocean. JIANG XUBING / CHINA DAILY

Earlier this year, they submitted a petition, accompanied by the first batch of 184,712 signatures collected

water," which gives the impression that the water is not contaminated. "This kind of image manipulation

group, said that in TEPCO's monitoring results, the term "Not Detected" is used to indicate that radioactive

北原 博子

ご承知の通り10月から郵便料金が値上げされます。また、今年2月にはこれまで使ってきたクロネコメール便が廃止され、クロネコゆうメールとなり、それに伴い発送作業も複雑化しています。それに対応するため、荷物、文書はどれを使えば一番効率よく送れるかなど情報と知恵をくるくる回しながらの対応が必要となっています。また、賛同者の方から「高齢になったので郵便局までいかれない」という声がしばしば寄せられ、簡単に送金できるバーコードの利用などの検討など、意見広告の内容とはべつ

改憲を巡る状況は、この原稿を書いている9月下旬は、自民党の総裁選、立憲民主党の代表選が行なわれています。誰が次の首相になるのか、また、10月に召集される臨時国会の内容により、総選挙の日程、その争点など、不透明な部分が多く、意見広告はまだ次期の始動をどうするのか決めておりません。9月23日に立憲民主党の代表に選出された野

田佳彦氏は立憲の課題として「リベラルな方向と仲よくないりすぎているイメージ」（9月24日朝日新聞記事）を挙げており、「政権交代をめざす」とは言っても第2自民党ともおもえる政治思想です。だが首相になろうとも、どの政党が政権を担う

意見広告

憲法9条を守り、非戦の未来を

[illegible][illegible][illegible]

としても「自由」「平等」「公平」「平和」を謳う日本国憲法を政府に求める主権者としての行動を続けなければならないと改めて考えているところです。次号では次期意見広告の内容についてお知らせできるよう事務局体制を整えてまいります。

(きたはら・ひろこ)／市民意見広告運動事務局

読者のみなさんへ

★再稼働反対、樋口さんの本を読みます

新潟県新発田市 轡田 勝

柏崎刈羽原発再稼働は許してはなりません。横山道史さんの「本の紹介」で意を強くしました。樋口英明さんの本を読んでみます。

★政府を変えるしかない

千葉県船橋市 吉村りよみ
地球温暖化、原発を本気で止める政府に変える以外ないと思います。子や孫のために。

★地方自治を制限するな

東京都板橋区 鈴木義広
緊急事態に名を借りた国権の拡大・強化は地方自治を制限しようとするものである等、学びました。

★私ができることは何かと思う

神奈川県川崎市 匿名
ぼけていく頭でがんばって記事を読んでいます。同じ思いの人がいて活動してらっしゃる事、頭が下がります。私ができることは何かとの思いで生活しています。

市民の意見30の会・東京 2024年7月～8月 会計報告

収支計算書

収入の部		支出の部	
一般会費	157,500	印刷費*3	288,627
協会の会費	80,000	発送費*4	177,696
敬老会費	228,000	編集経費*5	45,380
グリーン会費	2,000	旅費交通費*6	178,450
(会費小計)	467,500	家賃*7	401,669
カンパ	228,000	通信光熱費	37,585
事務所費分担*1	200,000	事務経費	34,868
雑収入*2	4,000	銀行手数料*8	7,150
受取利息	67	諸会費	102,000
		租税公課	0
収入計	899,567	支出計	1,273,425
		収支差額	▲ 373,858
前期繰越	11,710,324	当期残高	11,336,466

貸借対照表 (2024年8月31日現在)

資産の部		負債・資本の部	
現金	84,638	預り金*9	64,000
預貯金	13,039,363	FIY基金	2,203,535
敷金	480,000	正味財産	11,336,466
合計	13,604,001	合計	13,604,001

(※1)「意見広告運動事務所」経費分担金。(※2)グッズ販売。(※3)会報204号印刷。(※4)会報クロネコゆうメール及び個別発送等。(※5)執筆謝礼図書カード204号分、打合せ通信交通費ほか。(※6)事務所通所費(意見広告運動ボランティア通所費含)ほか。(※7)契約更新料・補償保険料含む。(※8)郵便振込通知票発行料含。(※9)意見広告運動賛同金預かり分。

会計報告をお届けします。※会費期限はお届けする封筒宛名シールの住所とお名前の間の行に記されています【例：(→2024/12)】。会費管理の関係から、会費前納は3年を越えないようお願いいたします。会費前納が重なりますと、カンパ扱いとせざるを得ない場合があります。毎号、振替用紙を同封していますが、これは会費以外の送金などにお使いいただくためのものです。会費切れの方を除き、会費請求のために同封するものではありません。ご理解のほどお願いいたします。

★本当のことを知りたくて読みつづけてます

福岡県八女市 高野久仁子

★会誌にはいつも眼を開かれます。感謝

愛知県稲沢市 林幸治

★閣議決定で改憲していく政治は終わらせよう！

山形県山形市 鈴木康紀

編集委員

阿部めぐみ

天野恵一

有馬保彦

(本号担当)

梶野 宏

北原博子

西田和子

横山道史

吉田和雄



編集後記

●裏金とカルト（統一教会）まみれの底なし腐敗自民政権の交代。心ある人が、だれでもそう考えざるをえない状況下で、野党第一党の「立憲民主」の党首が野田佳彦に変わった。

「あなたが6月8日に行なった記者会見の内容は本当にひどいものです。メチャクチャです。あなたは『福島を襲ったような地震・津波が襲っても、事故を防止できる体制は整っている。すべての電源が失われるような事態でも、炉心損傷にいたらないことが確認されている』と言います。どうしてそんなことが言えるのですか。福島原発事故の原因さえまだ明らかにならず。新しい『安全基準』さえできていないのですよ。その一方であなたは『実質的に安全は確保されているものの、政府の安全基準は暫定的なものである』ことを認めています。矛盾しているとは思いませんか。『暫定的な安全』などというものはありません。それはつまり『安全』ではないということです。『炉心損傷にいたらないことは確認されている』ですって？ そんな確認など誰

もできないはずですよ。なぜあなたはそんな断言ができるのですか。無責任のきわみです。……」

2012年6月16日付の私（たち）が原発再稼働反対行動のためにスタートさせた団体「再稼働反対！ 全国アクション」の「申し入れ」文の書き出しの部分である。最後の民主党首相野田が、強引に原発再稼働もスタートさせたのであり、野田から帰ってきた自民党安倍晋三政権へとバトンはリレーされ、原発再稼働は進められているのである。野田は自民党そのものであるような男であることを、忘れまい。

（天野恵一）

●この7月、福島原発被害東京訴訟の判決前最後の意見陳述で、鴨下原告団長は、原発事故の被爆者は急性心筋梗塞や癌の発症率・重症化率が全国平均をはるかに上回っている」と述べ、国や都は原発事故による被害をせめて補償してほしい、仮設住宅からの追い出しは不当だと静かに訴えました。自らの癌の発病にも触れられた、科学者としての苦悩を思うと胸が痛みます。10月7日、東京地裁での判決公判、傍聴（応援！）に行つて参ります。

（阿部めぐみ）

●本誌校正の最中、自民党総裁に石破茂衆

議院議員が選出されたとの報が入った。彼はアジア版NATOを提唱している。防衛省自衛隊は、既にNATO加盟国のフランス、イタリア、スペインと日本国内で共同訓練を継続的に行なっている。アジア太平洋では、フィリピンとも軍事的つながりが強化され、また、豪州とも日本の準同盟国として米国と共に共同訓練を行ない、潜水艦技術の提供もしている。その豪州は原子力潜水艦取得に向けて動き出している。アジア版NATOへの既成事実化が着々と進んでいるのではないかと。（有馬保彦）

●昨年10月に、茨城県潮来市での「第46回全国育樹祭」（2023年11月開催）に反対するデモのビラを貼るために水戸市内の大学に入った2名が、建造物侵入容疑により令状逮捕された。一年近く前の事案で、しかも当日に大学当局（守衛）とトラブルがあったわけでは全くないという。「育樹祭」は皇太子（現在は皇嗣）が、天皇が植樹祭で植樹した木を「お手入れ」する天皇制イベント。あからさまな天皇制反対運動に対する弾圧である。茨城育樹祭ビラ弾圧救済会（<https://ikui-i-baraki.hatenablog.com/>）への支援を！

（梶野宏）